千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告書

新東原遺跡b地点
内野南遺跡c地点
逆水遺跡d地点
新東原遺跡c地点
下船田遺跡b地点
木戸前遺跡c地点
保品庚塚遺跡
稲荷前遺跡c地点
高津梅屋敷遺跡b地点
大和田新田芝山遺跡b地点

平成15年度

八千代市教育委員会

Ⅰ　調査に至る経緯

八千代市は，首都圏のベットタウンとして開発が進んだ地域であり，平成８年４月の東葉高速鉄道の開業以来，さらにこの性格を強めている。そうした状況の中，八千代市教育委員会では千葉県教育委員会の指導のもと，開発事業者からの「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会（以下「照会」と略）に対処し，埋蔵文化財の保護に努めている。このうち発掘調査が必要と判断される遺跡については，国庫と県費の補助を受け市内遺跡発掘調査事業として調査を実施している。

以下は，平成14年度に市内遺跡発掘調査事業として発掘調査を実施した遺跡の調査に至る経緯である。

新東原（しんとうばら）遺跡ｂ地点

平成14年３月20日，ジェイフォン株式会社より市内勝田字新東原1266の一部の330㎡について携帯電話用無線基地局建設のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ，現況は畑地で，縄文土器等の遺物の散布を確認することができた。照会地は周知の遺跡の範囲内であり，過去の周辺の調査実績や，遺物の散布を確認できることから，遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し，３月25日その旨回答した。その後，この回答に沿ってジェイフォン株式会社と協議した結果，４月15日文化財保護法第57条の２第１項の規定による土木工事のための発掘届（以下「土木工事の届」と略）が提出され，準備が整った４月30日に調査を開始した。

内野南（うちのみなみ）遺跡ｃ地点

平成14年１月18日，小川昭二氏より市内吉橋字内野1068-2他の18,103㎡（後日22,911.10㎡に変更）について店舗建設のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ，現況は山林であったため，遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし，照会地は周知の遺跡の範囲内であり，過去の周辺の調査実績から，遺構が検出される可能性があると考えられた。小川昭二氏と協議した結果，照会地の面積が広いため試掘調査を実施し，その結果を受けて回答することとなった。２月８～14日試掘を実施した結果，土坑数基が検出された。このため，照会地全域について確認調査が必要と判断し，２月20日その旨回答した。その後，この回答に沿って小川昭二氏と協議した結果，４月１日土木工事の届が提出され，準備が整った５月８日に調査を開始した。

逆水（さかさみず）遺跡ｄ地点

平成14年５月９日，岩井義和氏より市内米本字逆水1222の一部他の2,645㎡について資材置場建設のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ，現況は山林であったため，遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし，照会地は周知の遺跡の範囲内であり，過去の周辺の調査実績から，遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し，５月13日その旨回答した。その後，この回答に沿って岩井義和氏と協議した結果，５月15日土木工事の届が提出され，準備が整った５月22日に調査を開始した。

新東原（しんとうばら）遺跡ｃ地点

平成14年９月18日，株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモより市内勝田字新東原1276-1の359㎡について携帯電話用無線基地局建設のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ，現況は山林及び畑地で，山林においては遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。また，畑地においては遺物の散布を確認することはできなかった。しかし，照会地は周知の遺跡の範囲内であり，過去の周辺の調査実績か

ら，遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し，９月24日その旨回答した。その後，隣接する山林及び農道189.59㎡について追加の照会が提出され，現地踏査の結果，先の回答と同様に照会地全域について確認調査が必要との回答を行った。その後，これらの回答に沿って株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモと協議した結果，９月30日併せて548.59㎡について土木工事の届が提出され，準備が整った10月２日に調査を開始した。

下船田遺跡ｂ地点

平成14年９月13日，三代川茂雄・三代川仁子氏より市内大和田新田字新木戸前49-2の一部の463.32㎡について宅地造成のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ，現況は畑地で，稀少ではあるが土師器等の遺物の散布を確認することができた。照会地は谷津に位置していたが，周知の遺跡の範囲内であり，稀少ではあるが遺物の散布を確認できることから，遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し，９月24日その旨回答した。その後，この回答に沿って三代川茂雄・三代川仁子氏と協議した結果，10月４日土木工事の届が提出され，準備が整った10月８日に調査を開始した。

木戸前遺跡ｃ地点

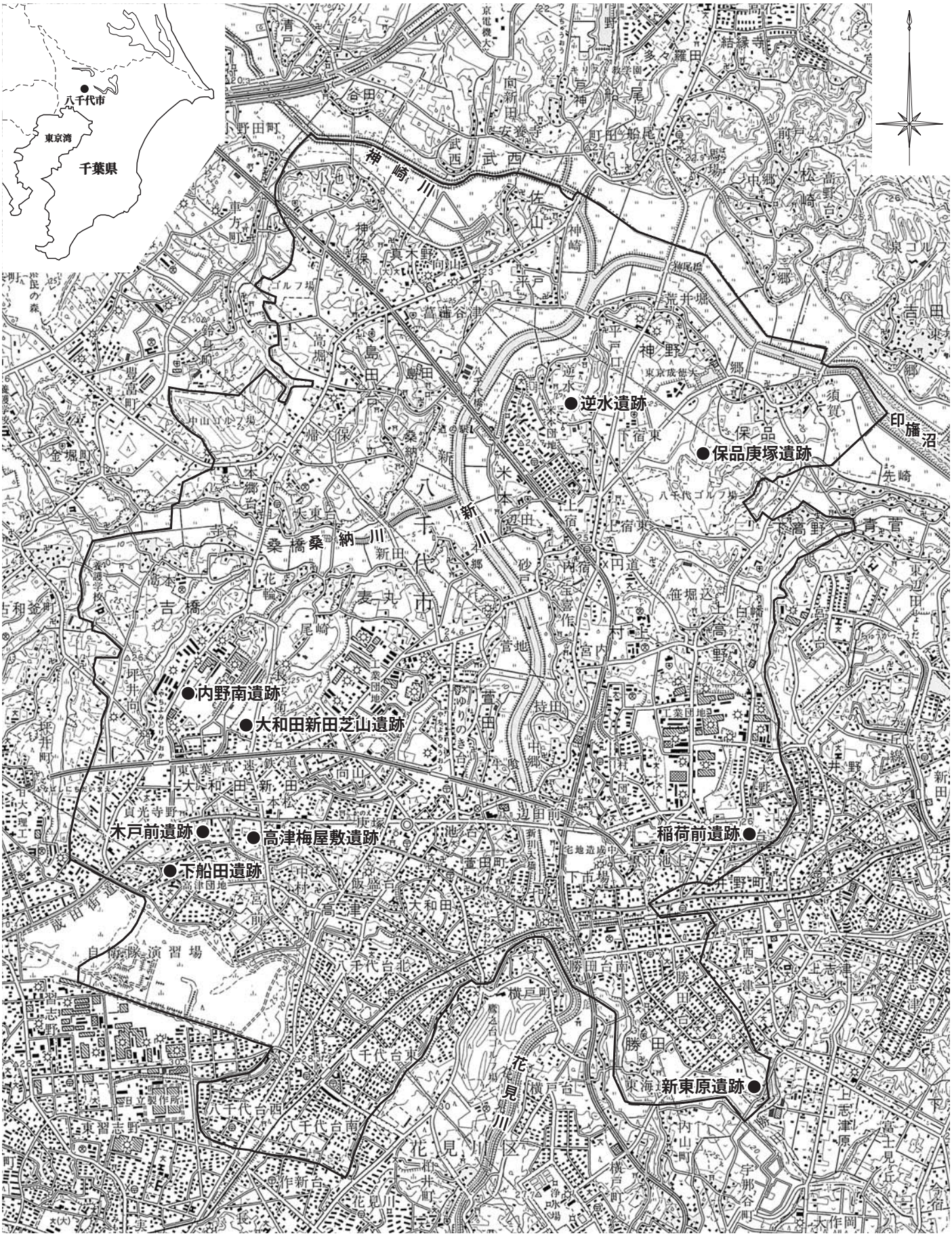
平成14年11月29日，ＫＤＤＩ株式会社より市内大和田新田字新木戸前94-55の60㎡について携帯電話用無線基地局建設のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ，現況は荒蕪地であったため，遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし，照会地は周知の遺跡の範囲内であり，過去の周辺の調査の実績や，周辺の畑地において稀少ではあるが縄文土器等の遺物の散布を確認できることから，遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し，12月３日その旨回答した。その後，この回答に沿ってＫＤＤＩ株式会社と協議した結果，12月４日土木工事の届が提出され，準備が整った12月10日に調査を開始した。

保品庚塚遺跡

平成14年11月８日，八千代興業株式会社より市内保品字庚塚1634-2他の28,845㎡についてゴルフ場の拡張造成のための照会が提出された。照会地の地形は谷津及びその周りの台地縁辺～斜面部であった。八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ，照会地の現況は谷津が荒蕪地，台地縁辺～斜面部が山林であった。そのため遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし，照会地内の台地部については周知の遺跡の範囲内であり，北側隣接地において縄文土器・土師器等の遺物の散布が確認できることから，遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地内の台地部3,200㎡についてのみ確認調査が必要と判断し，11月18日その旨回答した。その後，この回答に沿って八千代興業株式会社と協議した結果，12月４日土木工事の届が提出され，準備が整った12月13日に調査を開始した。

稲荷前遺跡ｃ地点

平成14年12月25日，中村市子氏より市内上高野字上谷津台1126-1の一部他の2,156.81㎡について共同住宅建設のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ，現況は駐車場及び荒蕪地であったため，遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし，照会地は周知の遺跡の範囲内であり，過去の周辺の調査実績から，遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し，平成15年１月10日その旨回答した。その後，この回答に沿って中村市子氏と協議した結果，１月30日土木工事の届が提出され，準備が整った２月５日に調査を開始した。



第１図　市内遺跡位置図（Ｓ＝1：50,000）

高津梅屋敷遺跡（たかつうめやしき）ｂ地点

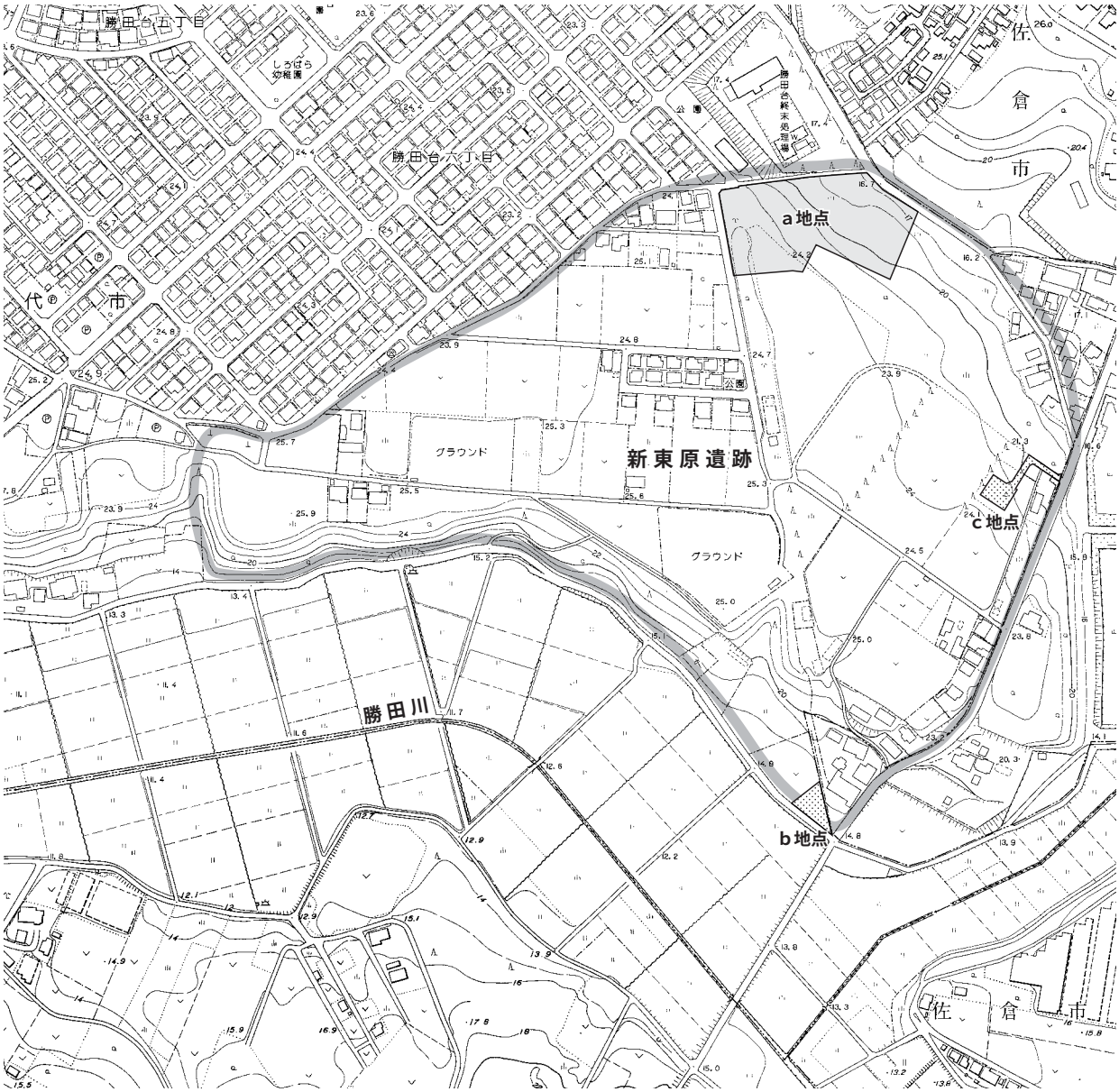
平成15年１月９日，鈴木薫明氏より市内大和田新田字新木戸前111-1の一部の2,244.52㎡について店舗建設のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ，現況は谷津を埋め立てた畑地であったため，遺物の散布状況を確認できる地点はなかった。しかし，谷津という立地ではあったが，照会地は周知の遺跡の範囲内であり，照会地周辺では稀少であるが縄文土器・土師器等の遺物の散布が確認できることから，遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し，１月15日その旨回答した。その後，この回答に沿って鈴木薫明氏と協議した結果，１月31日土木工事の届が提出され，準備が整った２月19日に調査を開始した。

大和田新田芝山遺跡（おおわだしんでんしばやま）ｂ地点

平成15年１月９日，石井忠・石井登久氏より市内大和田新田字芝山889-5の1,947.71㎡について共同住宅建設のための照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ，現況は荒蕪地であったため，遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし，照会地は周知の遺跡の範囲内であり，過去の周辺の調査の実績や，周辺の畑地において稀少ではあるが縄文土器等の遺物の散布を確認できることから，遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し，１月15日その旨回答した。その後，この回答に沿って石井忠・石井登久氏と協議した結果，１月31日土木工事の届が提出され，準備が整った２月21日に調査を開始した。

Ⅱ　各遺跡の概要

1．新東原遺跡ｂ地点

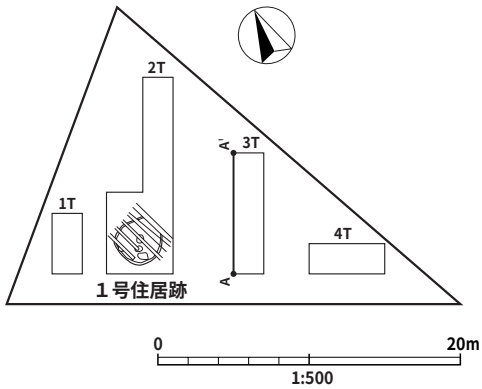


第２図　新東原遺跡位置図（Ｓ＝1：5,000）

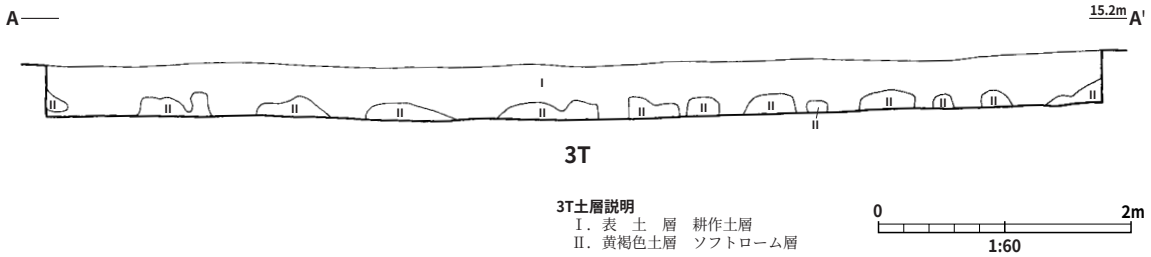
遺跡の立地と概要

新東原遺跡は，八千代市南東部の佐倉市及び千葉市との市境付近，勝田川の北岸の舌状台地上に立地している。この舌状台地は南側を勝田川，東から北側にかけてを勝田川の支流から入り込む谷津によって開析されている。遺跡の広がりは，台地上平坦部を主体として緩斜面部から低位段丘までおよんでいる。台地上の標高は約22～25m，低位段丘の標高は約15～18mである。

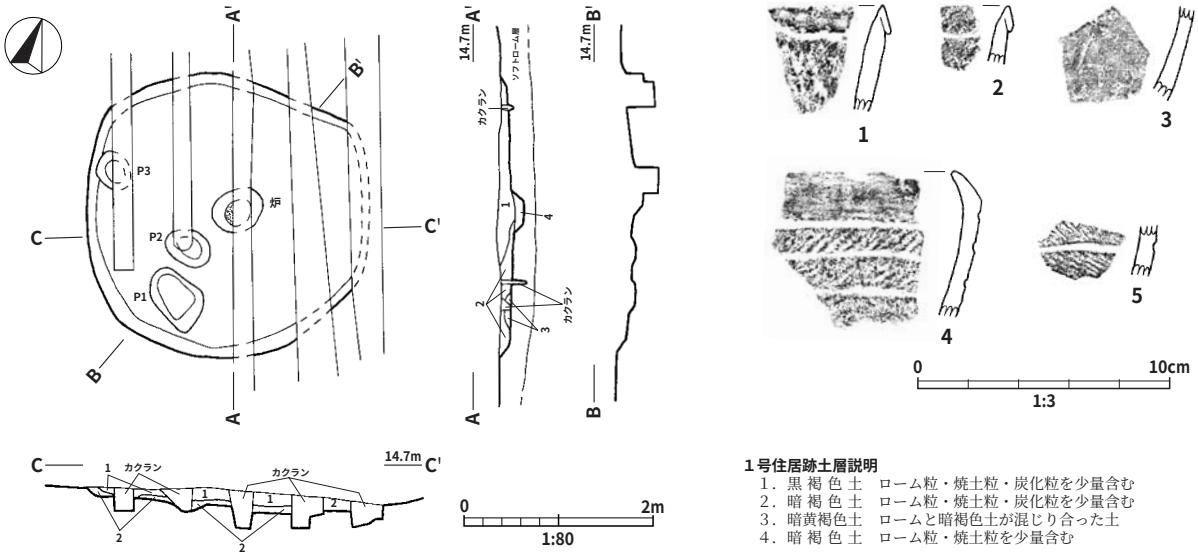
新東原遺跡では，平成13年度に八千代市教育委員会によってａ地点の調査が実施されている（註１）。ａ地点は新東原遺



第３図　新東原遺跡ｂ地点遺構配置図



第４図　新東原遺跡ｂ地点土層断面図



第５図　新東原遺跡ｂ地点１号住居跡

跡の北端，勝田川の支流から入り込む谷津を臨む台地縁辺部から斜面部にかけて位置している。遺構は縄文時代土坑５基，近世以降溝１条等，遺物は縄文土器(後期加曽利Ｂ式)が少量出土している。

今回の調査区はｂ地点である。ｂ地点は舌状台地の先端，勝田川を臨む標高15m前後の低位段丘上に位置している。水田面との比高差は約２～３ｍである。位置的には新東原遺跡の南端にあたる。調査区の現況は畑地で，現地踏査においては縄文土器の散布が確認されている。現地踏査の結果から，ｂ地点の調査では縄文時代の遺構の存在が想定された。

調査の方法と経過

調査は，調査区の形状に合わせて幅２ｍのトレンチを４本設定して実施した。検出状況を確認しながら，適宜，トレンチの拡張を行い，遺構の捕捉に努めた。最終的に74㎡について表土除去・遺構検出作業を行ったが，検出された遺構が少なかったため，遺構の周辺のみトレンチを拡張し，この遺構の本調査も併せて行った。

調査期間は平成14年４月30日～５月７日である。４月30日器材搬入，トレンチ設定，重機によるトレンチ表土除去作業，遺構検出作業，４月30日～５月２日遺構調査，５月１・２日実測・撮影等記録作業，２日重機によるトレンチ埋め戻し作業，７日器材撤収により調査を終了した。

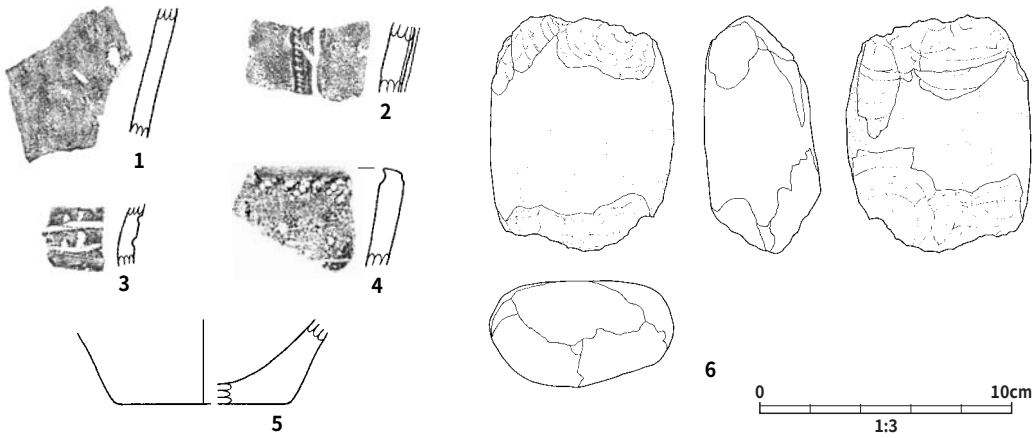
調査の概要

調査区の基本層序は，Ⅰ表土層(耕作土層)，Ⅱ黄褐色層(ソフトローム層)である。遺構検出作業はⅡ層の上面で行った。地表面から遺構検出作業面までの深さは約0.4mである。

調査の結果，縄文時代住居跡１軒を検出することができた。この住居跡を１号住居跡とする。

１号住居跡

２Tより検出された。全体にトレンチャーによるカクランを受けている。平面形は不整円形，規模は長軸3.24ｍ×短軸2.95ｍ×深さ0.06～0.18ｍである。床面は地山のソフトロームで，中央付近が壁際よりも少し低くなっ



第６図　新東原遺跡ｂ地点トレンチ出土遺物

ている。特に床面において硬化しているところはなかった。周溝は検出されなかった。炉は地床炉で床中央に位置している。深さ0.12mで，火床は微かに赤化している。ピットは３基検出され，それぞれの深さはＰ１が0.07m，Ｐ２が0.05m，Ｐ３が0.11mである。主柱穴は検出されなかった。

遺物は縄文土器が12片出土している。前期後半の土器が主体であるが後期加曽利Ｂ式も２点含まれている。ほとんどが細片であるため図示できるものは少ない。第５図１～３は前期後半の土器である。１・２は口縁部に輪積み痕を残すもの，３は無文である。４・５は加曽利Ｂ１式の精製土器で，縄文帯を横位の沈線で区画している。４・５ともにトレンチャーによる住居跡内のカクランからの出土である。

出土遺物からこの住居跡は前期後半の所産と判断される。

トレンチ出土遺物

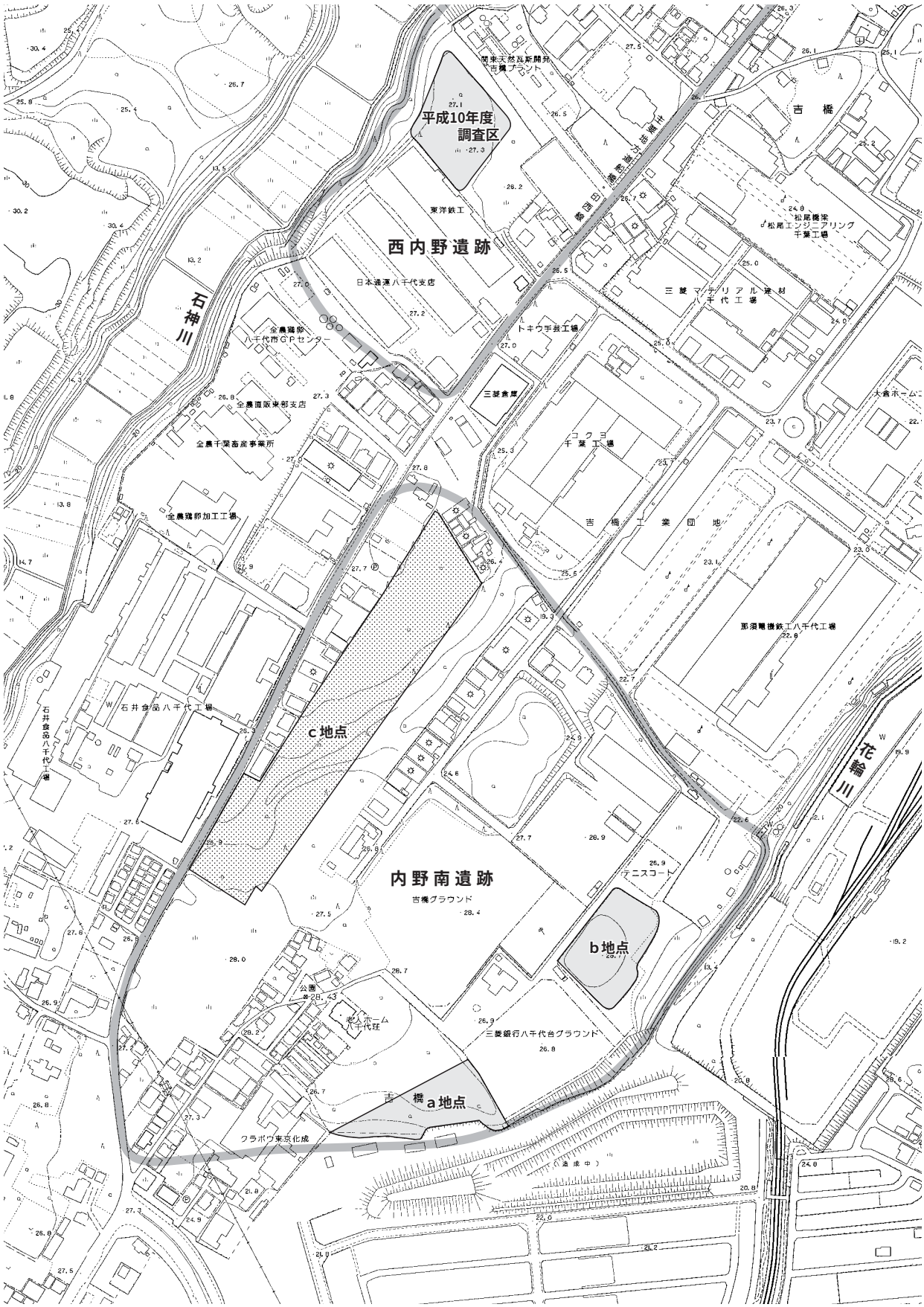
トレンチからは縄文土器22点・礫器１点が出土している。ほとんどの遺物が１号住居跡が検出された２Tからの出土である。１号住居跡と同様に前期後半の土器が主体となっているが，中期初頭や後期中葉の土器も認められる。ほとんどが細片であるため図示できるものは少ない。第６図の遺物は全て２Tよりの出土である。１は前期後半の無文の土器である。２は中期初頭の土器である。隆帯の両側に押引き文と沈線が施文されている。３・４は加曽利Ｂ１式である。３は精製土器で沈線の区切り文である。４は粗製土器である。口縁にＬＲの縄文，胴部に条線，口縁内面に沈線が施文されている。５は底部である。６は焼礫の両端を加工した礫器である。長さ95㎜，幅73㎜，厚さ42㎜，重さ386.9gで，石質は流紋岩である。

調査のまとめ

これまで新東原遺跡は，遺物の散布状況等から，縄文時代中・後期に主体をおく遺跡として捉えられてきた。台地縁辺部から斜面部に位置するａ地点の調査においては縄文時代後期の遺構・遺物が検出されている。また，後頁にて述べるが，台地縁辺部から斜面部に位置するｃ地点においても，遺構は検出されなかったものの，縄文時代後期と思われる土器が数片出土している。ａ及びｃ地点の調査成果は，これまで捉えられてきた遺跡の性格を裏付ける形となっている。しかし，低位段丘に位置する今回のｂ地点の調査では縄文時代前期後半の住居跡１軒が検出され，遺物も縄文時代後期の土器は数点出土しているものの，その主体となるのは前期後半の土器である。ｂ地点は調査面積が狭いため今後調査例が増加しないと具体的なことはいえないが，低位段丘という立地から台地上の遺跡とは少し様相が異なるのかもしれない。いずれにせよ今回のｂ地点の調査によって従来より縄文時代中・後期に主体をおく遺跡として捉えられてきた新東原遺跡に新たな知見を得ることができたといえよう。今後新東原遺跡周辺は発掘調査が増えることが予想されており，次第に遺跡の様相も明らかになっていくものと思われる。今後も資料を蓄積しながら分析していきたい。

（註１）八千代市教育委員会　2003　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成14年度』

2．内野南遺跡ｃ地点



第７図　内野南遺跡位置図（Ｓ＝1：5,000）

遺跡の立地と概要

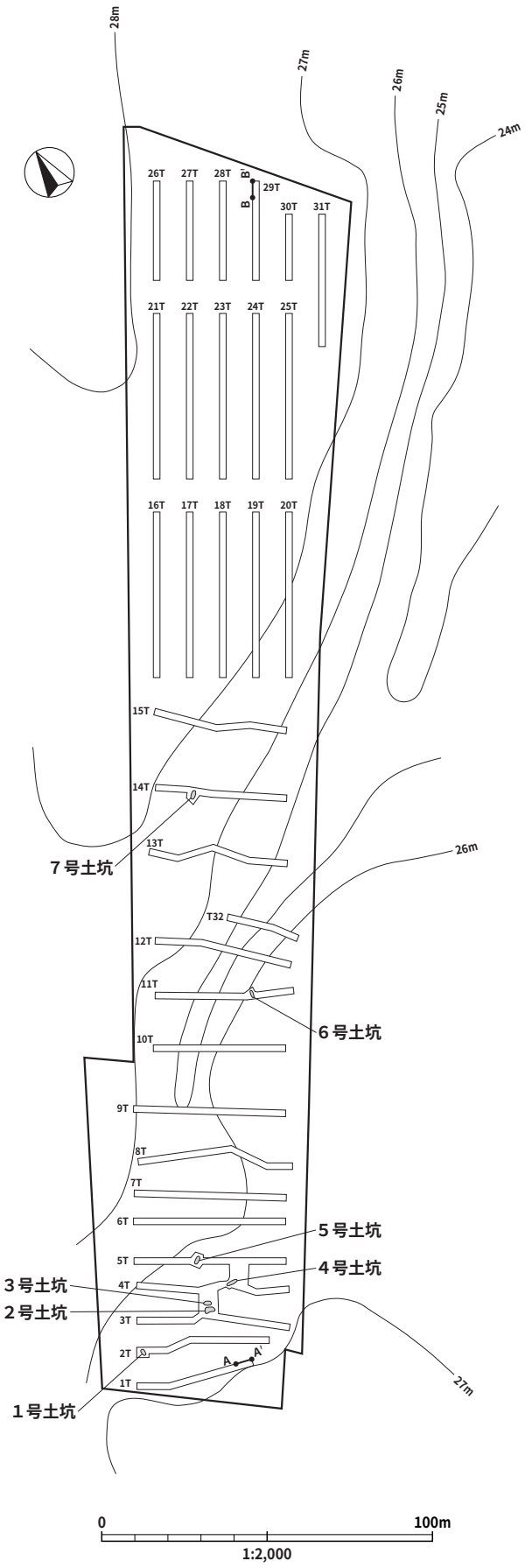
内野南遺跡は，八千代市西部，桑納川の支流である花輪川西岸の台地上に立地している。標高は約22～28m，水田面との比高差は約８～14mである。また，遺跡の北部には花輪川から小さな谷津が入り込んでいる。

内野南遺跡では，今回の調査を除いてこれまでに２地点において調査が実施されている。ａ地点は平成９・10年度に八千代市遺跡調査会によって調査が実施され，縄文時代早・前期の炉穴５基・土坑８基，奈良時代住居跡１軒が検出されてる（註１）。ｂ地点は平成10年度に八千代市教育委員会によって調査が実施され，縄文時代陥し穴状土坑１基と土坑１基が検出されてる（註２）。ａ・ｂ地点ともに花輪川を臨む台地上に位置している。また近隣では，西内野遺跡において平成10年度に八千代市教育委員会によって調査が実施されている（註３）。調査区は桑納川の支流である石神川を臨む台地上に位置しており，縄文時代住居跡２軒（前期～中期），遺構１基，土坑10基，時期不明溝１条が検出されている。

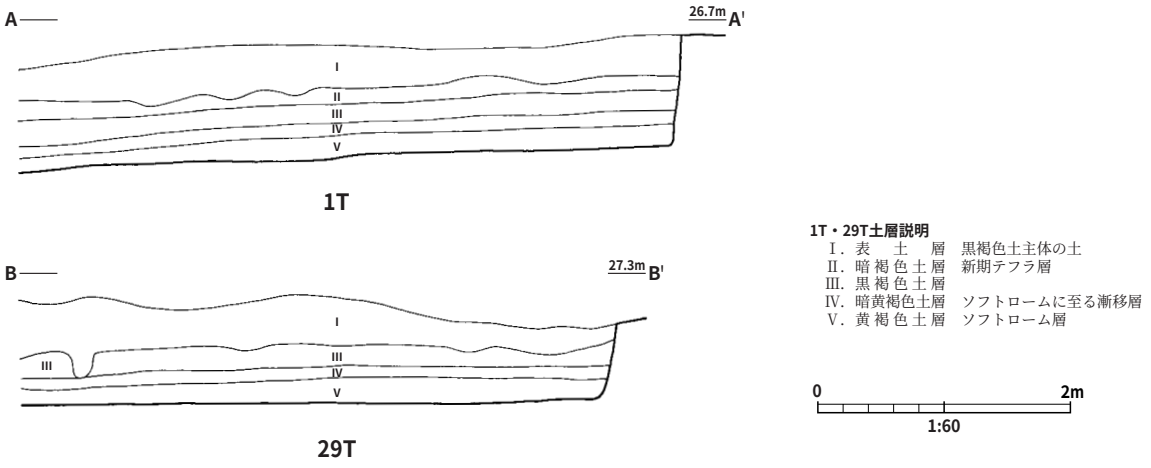
今回の調査区はｃ地点である。ｃ地点は花輪川から南西に入り込む小谷津の最奥部に位置している。この小谷津と小谷津を挟む両岸の台地上がｃ地点の範囲である。位置的には花輪川と石神川に挟まれた台地の中央部で，標高は約25～28mである。調査区の現況は山林であったため，現地踏査では調査区内において遺物の散布を確認できる地点はなかった。しかし，試掘を実施した結果遺構が検出されたため，確認調査を実施することとなった。これまでの内野南遺跡の調査では縄文時代を中心とした遺構が検出されていることから，今回のｃ地点の調査においても縄文時代の遺構の存在が想定された。

調査の方法と経過

調査は，伐採前であったため樹木を避ける形で，調査区の形状に合わせて幅２mのトレンチを設定して実施した。調査区南部は小谷津に直交するように東西方向に，北部の台地上は南北方向に設定して実施した。検出状況を確認しながら，適宜，トレンチの拡張・増設を行い，遺構の捕捉に努めた。最終的に2,792㎡について表土除去・遺構検出作業を行ったが，検出された遺構が少なかったため，遺構の周辺のみトレンチを



第８図　内野南遺跡ｃ地点遺構配置図



第９図　内野南遺跡ｃ地点土層断面図

拡張し，これらの遺構の本調査も併せて行った。

調査期間は平成14年５月８日～６月７日である。５月８日器材搬入，８～10日トレンチ設定，９～23日重機によるトレンチ表土除去作業，13～24日遺構検出作業，５月20日～６月３日遺構調査，５月31日～６月６日実測・撮影等記録作業，７日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序は，Ⅰ表土層，Ⅱ暗褐色土層（新期テフラ層），Ⅲ黒褐色土層，Ⅳ暗黄褐色土層，Ⅴ黄褐色土層（ソフトローム層）である。Ⅱ新期テフラ層は，調査区南部の谷津と台地上のトレンチにおいては確認されたものの，北部の台地上のトレンチにおいてはほとんど確認することができなかった。地表面から遺構検出作業面までの深さは，南部の台地上のトレンチが約0.7～0.9m，北部の台地上のトレンチが約0.5～0.7mである。遺構検出作業はⅤ層の上面で行った。

調査の結果，縄文時代の土坑７基を検出することができた。

１号土坑

２Tより検出された。平面形は長楕円形。規模は長軸1.98m×短軸1.15m×深さ0.65mで，主軸方位はN-12 °Wである。壁は上部に向かって急斜度で立ち上がる。底部は南半分を掘りすぎてしまった。ほぼ平坦で平面形は長楕円形である。底部施設などの明確な掘り込みは認められなかった。遺物の出土はなかった。

２号土坑

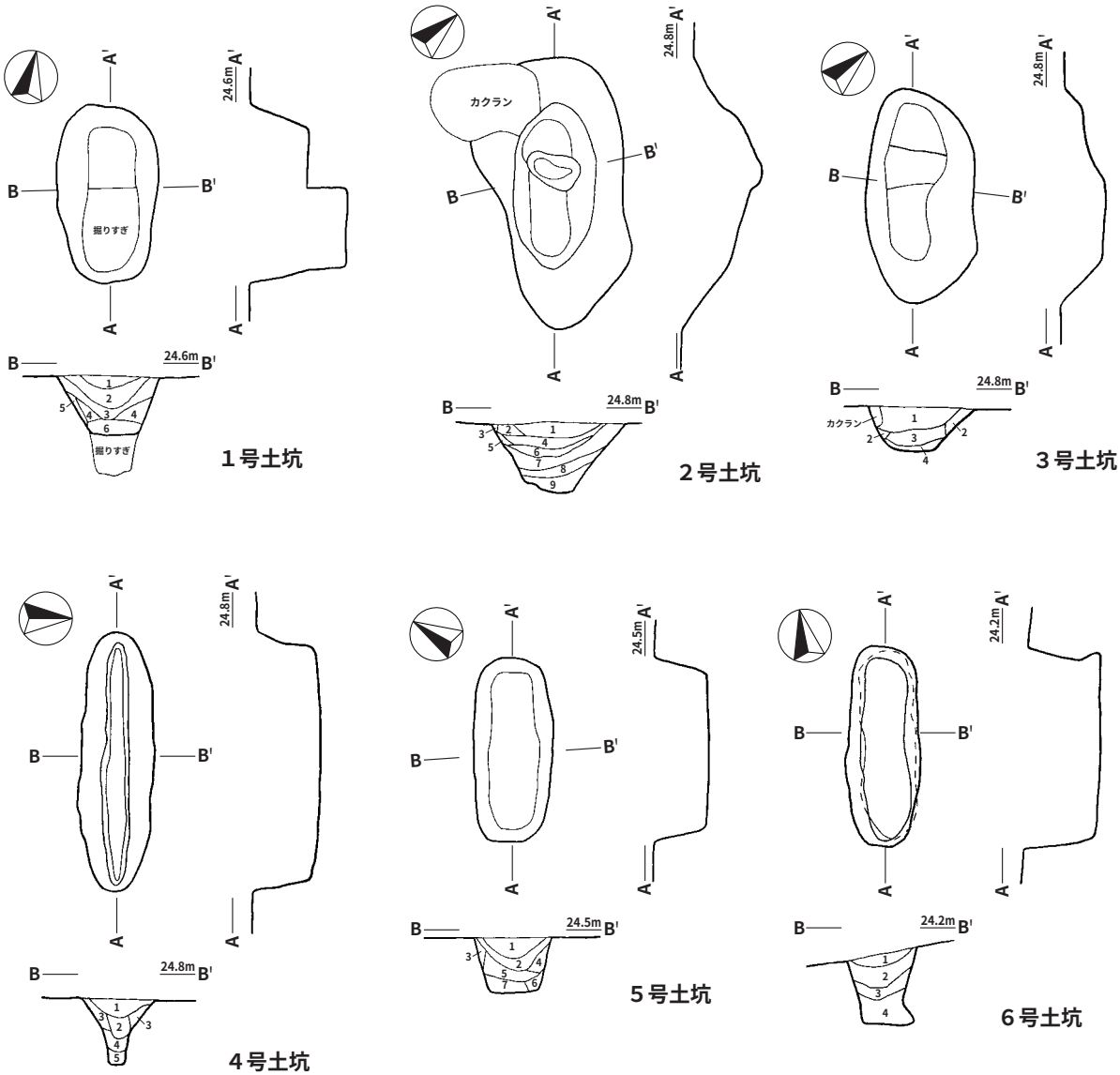
３Tより検出された。北側に３号土坑が隣接して位置する。平面形は不整長楕円形で，一部カクランを受けている。規模は長軸3.05m×短軸1.4m×深さ0.8mで，主軸方位はN-48 °Wである。壁は長軸方向が緩やかな斜度で立ち上がり，短軸方向が急斜度で立ち上がる。底部中央には長軸0.62m×短軸0.3m×深さ0.1mのピットが認められる。底部はこのピットに向かって緩やかに傾斜している。遺物は覆土中より石鏃が１点出土している（第11図１）。石質は黒曜石で，長さ11.5㎜，幅13.0㎜，厚さ3.0㎜，重さ0.4gである。

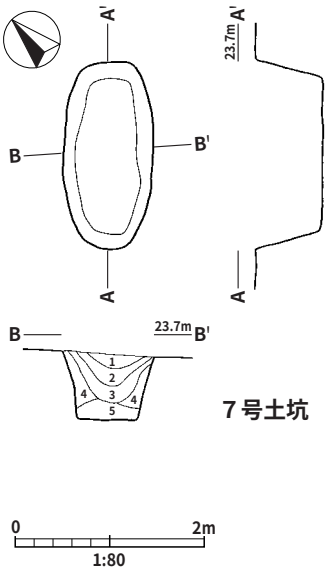
３号土坑

３Tを拡張した際，２号土坑の北側より検出された。平面形は不整長楕円形。規模は長軸2.4m×短軸1.22m×深さ0.5mで，主軸方位はN-48 °Wである。壁は緩やかな斜度で立ち上がる。底部は有段となっており，西端部が高くなっている。有段部の深さは0.2～0.25mで，中央に向かって少し傾斜している。遺物の出土はなかった。

４号土坑

４Tより検出された。平面形は長楕円形。規模は長軸2.9m×短軸0.83m×深さ0.74mで，主軸方位はN-90 °Wである。壁は，短軸方向では下半部はほぼ垂直に立ち上がり，上半部は上部に向かって急斜度で立ち上がる。長軸方向では下半部が短軸方向より傾斜が緩くなっている。底部はほぼ平坦である。底部施設などの明確な掘り込み





1号土坑土層説明

1．黒 褐 色 土　ローム粒を少量含む
2．黒　色　土　ローム粒を少量含む
3．暗 褐 色 土　ローム粒を微量含む
4．暗 褐 色 土　ローム粒を少量含む
5．暗黄褐色土　暗褐色土とロームが混じり合った土。ローム粒を多量含む
6．暗 褐 色 土　ローム粒を微量含む

2号土坑土層説明

1．黒　色　土　ローム粒を微量含む
2．暗 褐 色 土　ローム粒を微量含む
3．黄 褐 色 土　ソフトロームブロック
4．黒　色　土　ローム粒を少量含む
5．暗 褐 色 土　ローム粒を少量含む
6．黒　色　土　ローム粒及び径５～10㎜のロームブロック多量含む
7．黒 褐 色 土　ローム粒及び径５～30㎜のロームブロック多量含む
8．黒 褐 色 土　ローム粒を少量含む
9．黒 褐 色 土　ローム粒及び径５～30㎜のロームブロック多量含む

3号土坑土層説明

1．黒　色　土　ローム粒を微量含む
2．暗 褐 色 土　ローム粒を少量含む
3．黒　色　土　１層より色調やや暗い。ローム粒を微量含む
4．暗 褐 色 土　ロームが多量に混じる

4号土坑土層説明

1．黒　色　土　ローム粒を少量含む
2．暗黒褐色土　ローム粒を少量含む
3．黒 褐 色 土　ローム粒を少量含む
4．暗黄褐色土　暗褐色土を主体とし，ロームが多量混じる
5．暗 褐 色 土　ロームが少量混じる

5号土坑土層説明

1．黒　色　土　ローム粒を微量含む
2．黒 褐 色 土　ローム粒を微量含む
3．暗黄褐色土　暗褐色土を主体とし，ロームが多量混じる
4．褐　色　土　ローム粒を少量含む
5．暗 褐 色 土　ローム粒を微量含む
6．褐　色　土　ローム粒を少量含む
7．暗 褐 色 土　ローム粒を微量含む

6号土坑土層説明

1．黒　色　土　ローム粒を微量含む
2．黒　色　土　１層より色調やや明るい。ローム粒を微量含む
3．暗 褐 色 土　ローム粒を微量含む
4．暗黄褐色土　ローム粒を微量含む

7号土坑土層説明

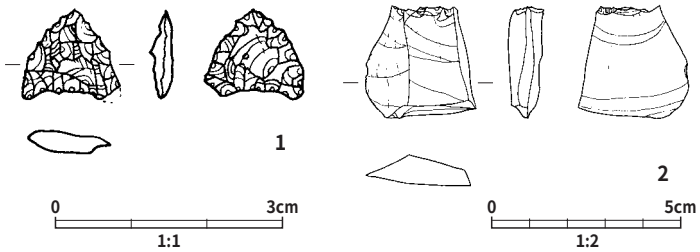
1．黒　色　土　ローム粒を少量含む
2．黒　色　土　ローム粒を微量含む
3．暗黒褐色土　ローム粒を少量含む
4．暗 褐 色 土　ロームが少量混じる
5．黒 褐 色 土　ロームが少量混じる

第10図　内野南遺跡ｃ地点土坑

は認められなかった。遺物の出土はなかった。

５号土坑

５Tより検出された。平面形は長楕円形。規模は長軸2.05m×短軸0.88m×深さ0.61mで，主軸方位はN-61 ºEである。壁は上部に向かって急斜度で立ち上がる。底部はほぼ平坦で，平面形は長楕円形である。底部施設などの明確な掘り込みは認められなかった。遺物の出土はなかった。



第11図　内野南遺跡ｃ地点出土遺物

６号土坑

11Tより検出された。斜面に位置している。平面形は長楕円形。規模は長軸2.23m×短軸0.79m×深さ0.82mで，主軸方位はN-12 ºEである。壁は下部がオーバーハングしており，中程で傾斜を変えて上部に向かって急斜度で立ち上がる。底部はほぼ平坦で，平面形は長楕円形である。底部施設などの明確な掘り込みは認められなかった。遺物の出土はなかった。

７号土坑

14Tより検出された。平面形は長楕円形。規模は長軸1.98m×短軸0.95m×深さ0.7mで，主軸方位はN-45 ºEである。壁は上部に向かって急斜度で立ち上がる。底部はほぼ平坦で，平面形は長楕円形である。底部施設などの明確な掘り込みは認められなかった。遺物の出土はなかった。

トレンチ出土遺物

トレンチからは縄文土器３点・礫１点・剥片１点が出土している。縄文土器は前期後半，中期前半，後期中葉の小片が各１片ずつの出土である。礫は流紋岩の小破片である。剥片は13Tよりの出土である（第11図２）。石質は頁岩で，長さ39.5㎜，幅29.5㎜，厚さ8.0㎜，重さ7.6gである。

調査のまとめ

今回のｃ地点の調査では，縄文時代の土坑７基を検出することができた。しかし，２号土坑の石鏃以外に遺構内からの遺物の出土がないため，時期を特定することはできなかった。性格的には１及び４～７号土坑は陥し穴状土坑，２及び３号土坑については性格不明の土坑として捉えている。

ｃ地点は，花輪川から南西に入り込む小谷津の最奥部，花輪川と石神川に挟まれた台地の中央部に位置している。土坑７基と出土遺物６点という調査結果は，調査面積約23,000㎡に対して散布が稀薄であるといわざるを得ない。花輪川を臨む台地上に位置するａ地点や石神川を臨む台地上に位置する西内野遺跡などでは密度が薄いながらも集落跡が検出されている。遺跡の主体は花輪川や石神川を臨む台地上にあり，ｃ地点は立地的に遺跡の主体となる地区から外れていたのであろう。ｃ地点付近は狩り場的な土地利用がされていたものと想像される。

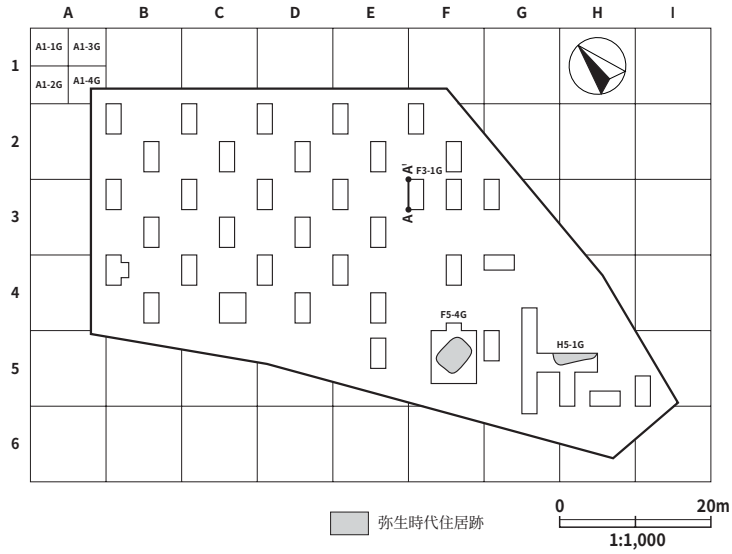
（註１）八千代市遺跡調査会　2000　『千葉県八千代市内野南遺跡ａ地点発掘調査報告書』
（註２）八千代市教育委員会　1999　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成10年度』
（註３）註２と同じ

3．逆水遺跡ｄ地点

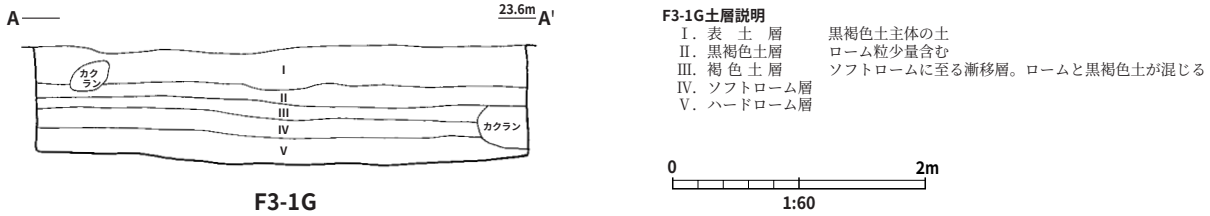
第12図　逆水遺跡位置図（Ｓ＝1：5,000）

遺跡の立地と概要

逆水遺跡は，市域の中央を流れる新川を北に臨み，東西を小支谷で区画される舌状台地平坦面に立地している。標高は23m前後であり，水田面との差は約18mである。遺跡の南方には，縄文時代を中心とする大山遺跡が展開する。逆水遺跡についての調査は，平成７年度に，ａ地点で弥生時代後期の竪穴住居跡４軒，中世の土壙墓17基等（当時の名称は逆水西遺跡），平成８年度に，ｂ地点で弥生時代中期の方形周溝墓７基，時期・用途不明の土坑・溝等を検出している。平成13年度のｃ地点の調査では，弥生時代後期の竪穴住居跡１軒を検出している。今回の調査区の現況は山林であり，ｃ地点と隣接している（註１）。



第13図　逆水遺跡ｄ地点遺構検出状況図



第14図　逆水遺跡ｄ地点土層断面図

調査の方法と経過

調査は調査区の形状に合わせ10mの間隔にグリッドを設定し，その区画を基に２m×４mのトレンチを設け遺構確認を行った。また必要に応じてトレンチの増設・拡張等を行った。調査期間は平成14年５月22～29日である。調査経過は，５月22～23日調査範囲にトレンチの設定，５月23～24日重機によるトレンチ掘り下げ，５月23～28日トレンチ内の遺構検出作業，５月24～28日セクション図等の作図作業・写真撮影等の記録を行う。５月29日一部下層調査と機材撤収により調査を終了した。

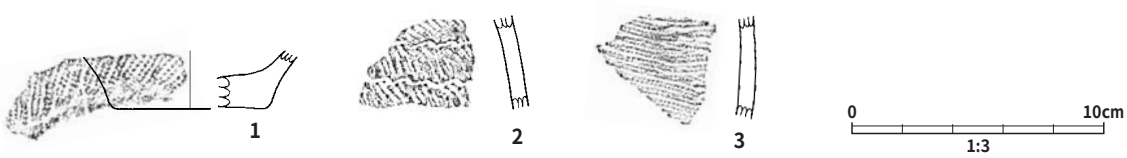
調査の概要

本遺跡の基本層序は，Ⅰ表土層，Ⅱ黒褐色土層，Ⅲ褐色土層，Ⅳソフトローム層，Ⅴハードローム層である。遺構確認は，Ⅲ層及びⅣ層上面において行い，深さは地表面から70～80㎝程度である。土層の堆積状況は，全体的に規則的な堆積が見られた。調査の結果，弥生時代後期の竪穴住居跡２軒が確認できた。住居規模は，約６×４mの隅丸長方形の住居跡と長軸が約5.1mの住居跡である。遺物は，住居跡検出トレンチに伴い弥生時代後期の土器と縄文土器が少量が出土している。ここでは，弥生時代土器片を図示する(第15図)。

１は，弥生時代後期の甕の底部片である。色調は，外面黒色，内面橙褐色，胎土は密で焼成は良好である。復元底径は6.0㎝である。外面には附加条縄文が施され，底部外面には木葉痕が残る。２は，弥生時代後期の甕の頸～胴部片である。色調は，外面黒色，内面橙褐色，胎土は密で焼成は良好である。外面の文様は，単節のＲＬ縄文＋Ｓ字状結節文で構成されている。３は，弥生時代後期の甕の胴部片である。色調は，外面褐色，内面黒色，胎土は密で焼成は良好である。外面には，附加条縄文を施してある。

調査のまとめ

今回ｄ地点の調査で，弥生時代後期の竪穴住居跡２軒が確認できた。これまでの調査と合わせ台地の基部と台地の西端に弥生時代後期の集落が存在することが明らかとなった。このことは，台地の先端から台地の基部へ展



第15図　逆水遺跡ｄ地点出土遺物

開する集落の様相が推測できる。広い台地に対して調査範囲がごくわずかであるため，まだ多くを述べることは出来ない。推測を重ねることとなるが，本遺跡の弥生時代後期を考えた場合，土器に施された文様は注目すべき点となるだろう。具体的には，口縁部及び胴部に縄文が施文され輪積痕を有するのか，もしくは櫛描文が施されるのかの２点である。以上のことを視野に入れつつ調査例を，積み重ね分析を加えていきたい。逆水遺跡は八千代市域のみならず印旛沼沿岸の弥生時代の様相を知る上で，可能性を秘めた遺跡と言うことが出来よう。

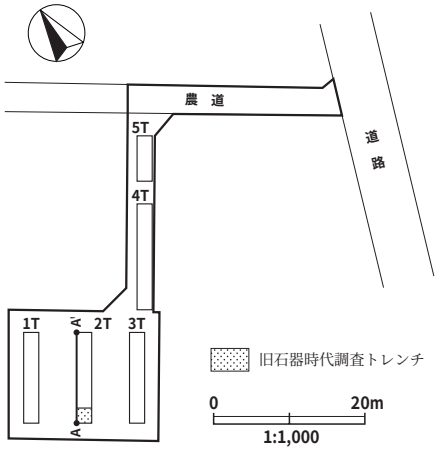
（註１）八千代市教育委員会　1996　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成７年度』
八千代市教育委員会　1997　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成８年度』
八千代市教育委員会　2003　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成14年度』

４．新東原遺跡ｃ地点

遺跡の立地と概要

新東原遺跡の立地と概要については，新東原遺跡ｂ地点の節で述べた通りである。

今回の調査区はｃ地点である（第２図）。ｃ地点は，ａ地点と同じく，勝田川の支流から入り込む谷津を北東に臨む台地縁辺部から斜面部にかけて位置している。標高は約18～24m，水田面との非行差は約７～13mである。調査区の現況は台地縁辺部が畑地，緩斜面部が山林と農道であった。現地踏査においては調査区及びその周辺においては遺物の散布は確認できなかった。しかし，ａ地点の調査成果から，分布は稀薄ながらもｃ地点においても遺構が検出される可能性があると判断された。今回のｃ地点の調査においてもａ地点と同様に縄文時代の遺構の存在が想定された。



第16図　新東原遺跡ｃ地点トレンチ配置図

調査の方法と経過

調査は，調査区の形状に合わせて幅２ｍのトレンチを５本設定して実施した。検出状況を確認しながら，遺構の捕捉に努め，最終的に112㎡について表土除去・遺構検出作業を行った。また，旧石器時代調査トレンチを１箇所設定し，掘削を行った。

調査期間は平成14年10月２～７日である。２日器材搬入，トレンチ設定，３日重機によるトレンチ表土除去作業，遺構検出作業，３・４日人力による旧石器時代調査トレンチ掘削作業，４日実測・撮影等記録作業，器材撤収，７日重機によるトレンチ埋め戻し作業により調査を終了した。

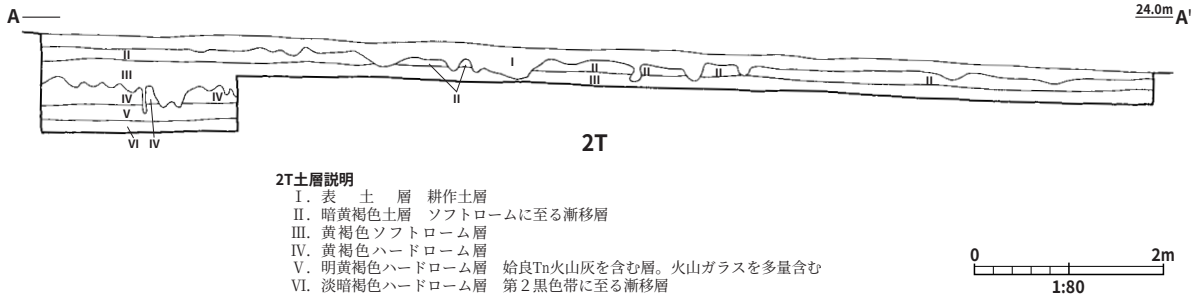
調査の概要

調査区の基本層序は，Ⅰ表土層，Ⅱ暗黄褐色土層，Ⅲ黄褐色ソフトローム層，Ⅳ黄褐色ハードローム層，Ⅴ明黄褐色ハードローム層，Ⅵ淡暗褐色ハードローム層である。遺構検出作業はⅢ層の上面で行った。地表面から遺構検出作業面までの深さは，１～３Tが約0.3m，４Tが約0.3～0.6mである。５Tにおいてはローム層を削って残土が埋められており，1.4m以上重機で掘り下げても地山を確認することはできなかった。

調査の結果，遺構は検出されなかった。遺物は後期と思われる縄文土器の小片を３片表採したのみである。

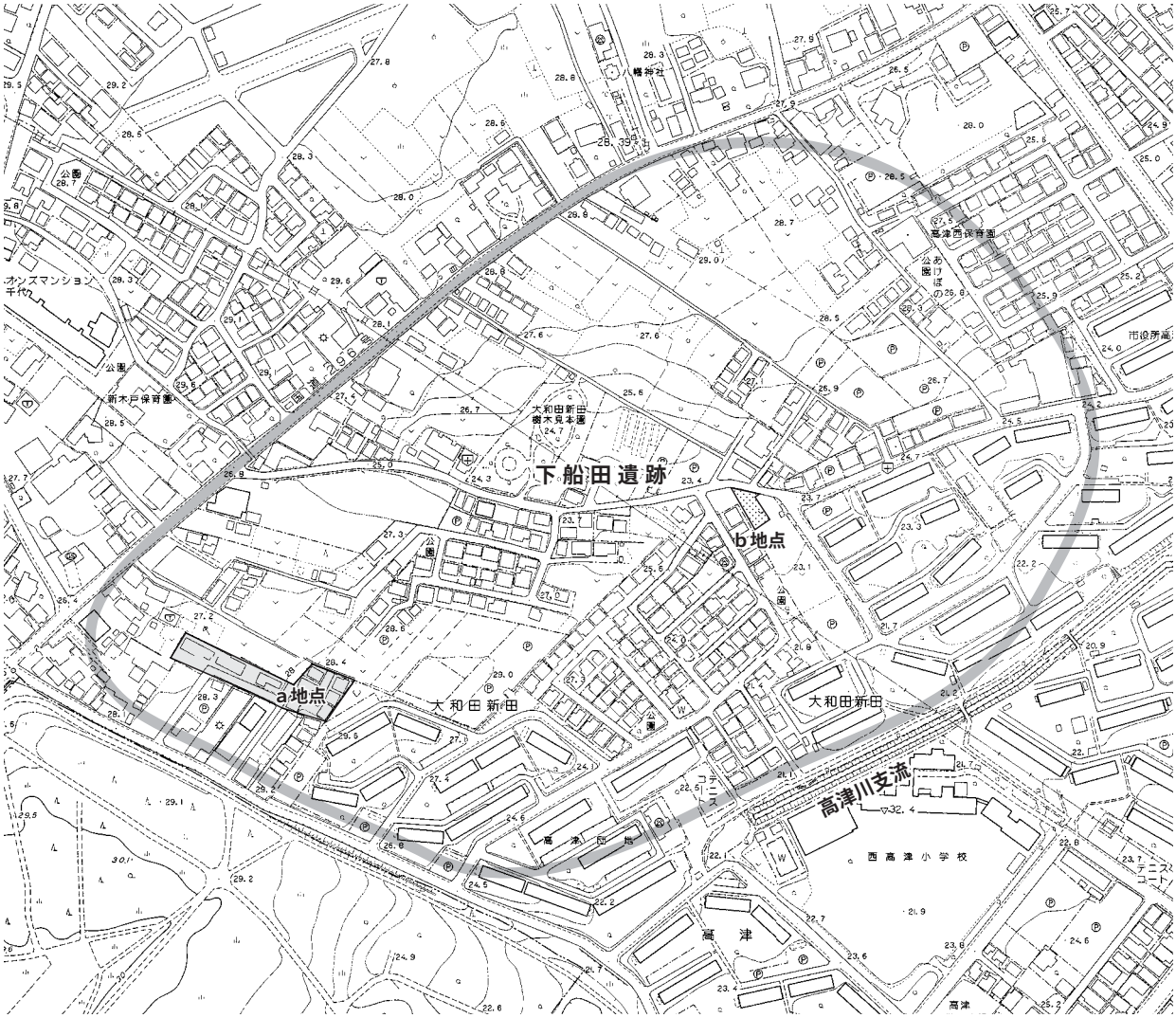
調査のまとめ

今回の調査では遺構は検出されなかった。表採された遺物からｃ地点はａ地点と同様に縄文時代後期の遺跡として捉えることができたものの，調査前の想定通り，調査区周辺は遺構の分布が稀薄な地域であることが確認できた。近年新東原遺跡周辺では発掘調査が増える傾向にあり，次第に遺跡の様相も次第に明らかになっていくものと思われる。今後の調査に期待したい。



第17図　新東原遺跡ｃ地点土層断面図

５．下船田遺跡ｂ地点



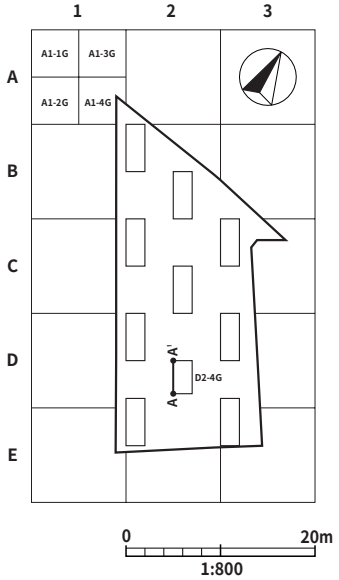
第18図　下船田遺跡位置図（Ｓ＝1：5,000）

遺跡の立地と概要

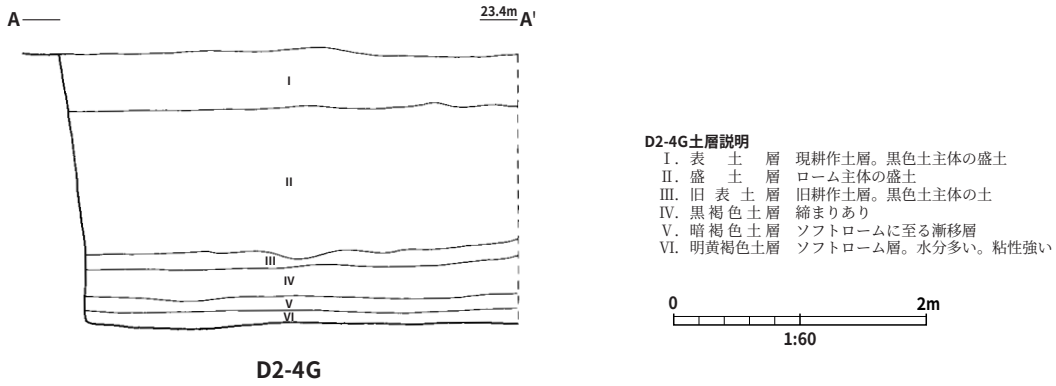
下船田遺跡は，八千代市南西部，高津川支流の北岸に立地している。遺跡の中央部には高津川の支流から西に向かって小さな谷津が入り込んでいる。この谷津及び谷津を挟む両岸の台地上が遺跡の範囲である。標高は約21～29mである。

下船田遺跡では，今回の調査を除いてこれまでに５地点において調査が実施されている。ａ地点は小谷津の南側の台地上に位置している。平成４年度に八千代市教育委員会によって調査が実施されたが，遺構は検出されず，縄文土器が数片出土したのみであった(註１)。また，昭和44・45年度に日本住宅公団高津団地(当時)造成に先行し，高津団地遺跡発掘調査団によって「高津遺跡」として４地点の調査が実施されている(註２)。しかし，４地点ともに遺構は検出されず，縄文土器と土師器が数片出土したのみであった。

今回の調査区はｂ地点である。ｂ地点は高津川の支流から入り込む谷津に位置している。標高は23m前後である。調査区の現況は畑地で，現地踏



第19図　下船田遺跡ｂ地点
トレンチ配置図



第20図　下船田遺跡ｂ地点土層断面図

査においては稀少ではあるが土師器の散布が確認されている。しかし，これまでの下船田遺跡の調査から，ｂ地点における遺構の分布は非常に稀薄であると想定された。

調査の方法と経過

調査は，調査区の形状に合わせて10mのグリッド（方眼）を組んだのち，これに平行する形で２m×５mのトレンチを基本として設定して実施した。検出状況を確認しながら，適宜，トレンチの増設を行い，遺構の捕捉に努めた。最終的に97㎡について表土除去・遺構検出作業を行った。

調査期間は平成14年10月８・９日である。８日器材搬入，トレンチ設定，９日重機によるトレンチ表土除去作業，遺構検出作業，実測・撮影等記録作業，重機によるトレンチ埋め戻し作業，器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

重機によるトレンチ表土除去作業の結果，全てのトレンチにおいて盛土が行われていることが確認された。盛土の厚さはⅠ・Ⅱ層合わせて約1.5m以上あり，そのうえ旧地表が深く削られていたため約２m以上掘削しても地山を確認できないトレンチがほとんどであった。

旧地表面が確認できたトレンチにおける基本層序は，Ⅰ表土層（現耕作土層），Ⅱ盛土層，Ⅲ旧表土層，Ⅳ黒褐色土層，Ⅴ暗褐色土層，Ⅵ明黄褐色土層（ソフトローム層）である。遺構検出作業はⅥ層の上面で行った。地表面からⅥ層の上面までは約２m前後である。

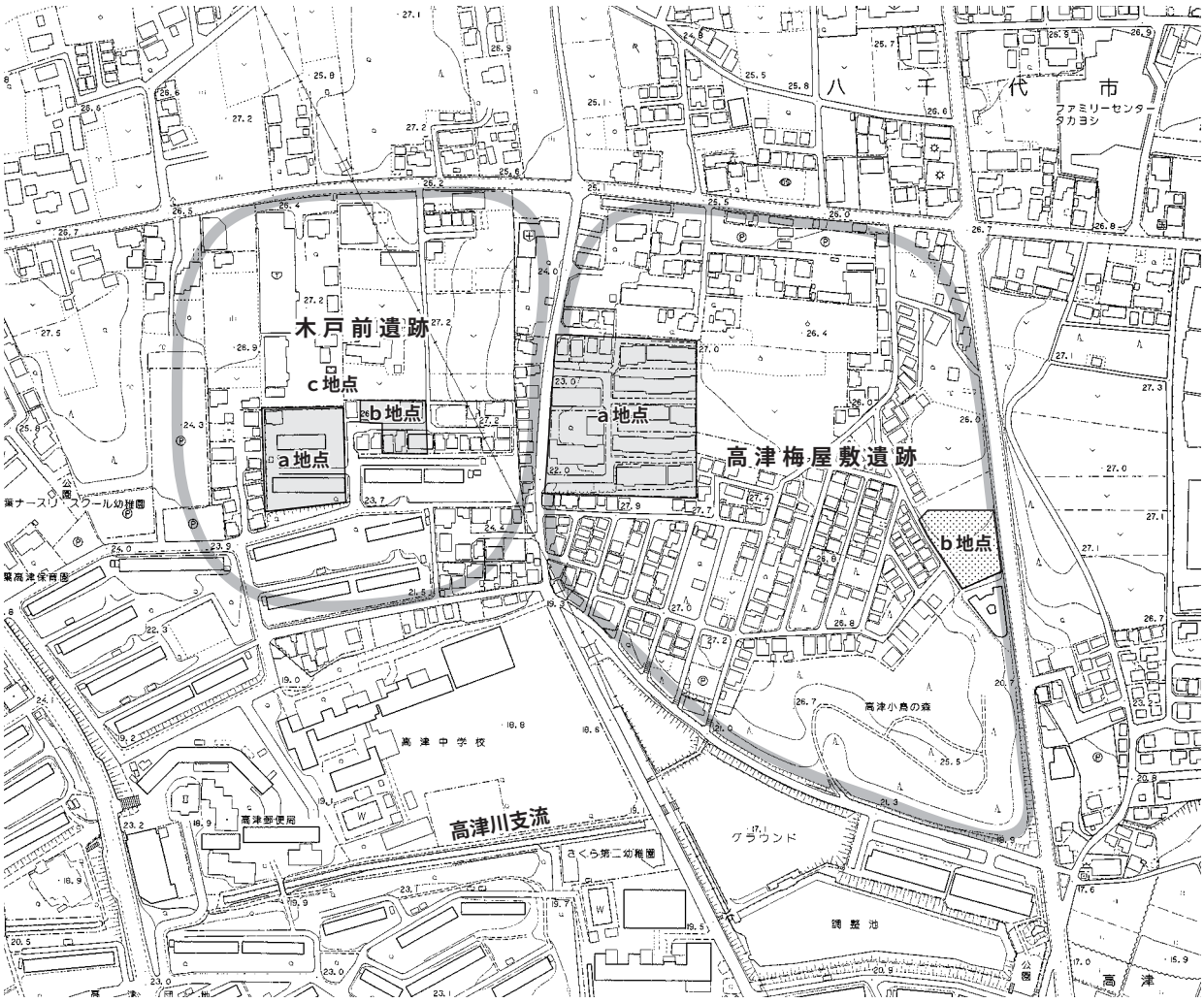
調査の結果，遺構・遺物は検出されなかった。現地踏査で確認された遺物は，本遺跡に伴うものではなく，盛土に混入していた遺物であった。

調査のまとめ

下船田遺跡においては，これまでに５地点において調査が実施されている。しかし，いずれも遺構は検出されず，遺物もほとんど出土していない。下船田遺跡における遺構の分布は非常に稀薄であるといえる。今回のｂ地点の調査においても遺構・遺物を検出することができなかった。遺構の分布が稀薄なうえ，谷津という立地，さらに調査区のほとんどにおいて旧地表面が削られ地山が確認できないという状況から考えると，やむ得ない結果であったといえるであろう。

（註１）八千代市教育委員会　1993　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成４年度』
（註２）丸子亘　1970　『千葉県八千代市高津遺跡発掘調査概報』立正大学博物館学講座研究小報４

6．木戸前遺跡ｃ地点

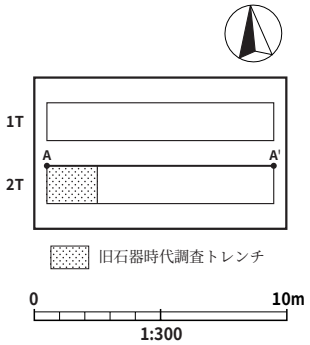


第21図　木戸前遺跡・高津梅屋敷遺跡位置図（Ｓ＝1：5,000）

遺跡の立地と概要

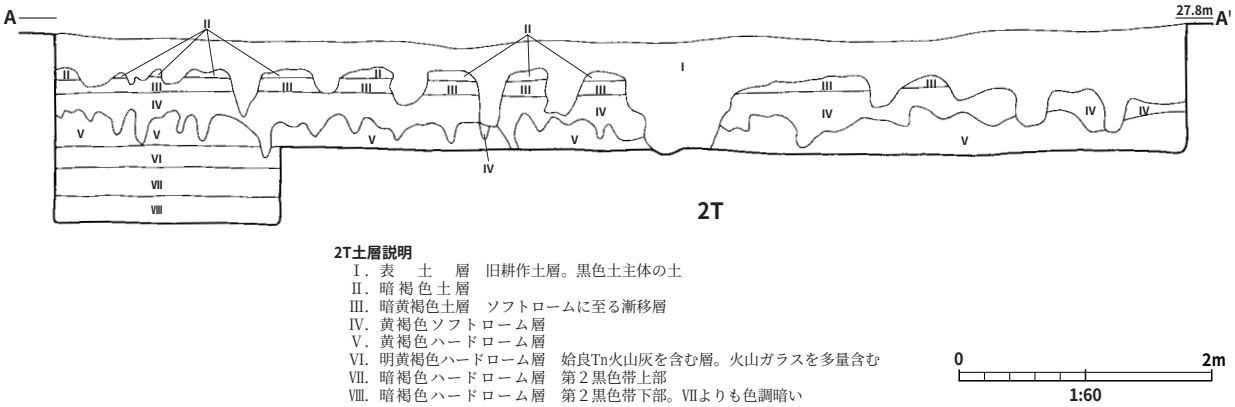
木戸前遺跡は，八千代市南西部，高津川支流の北岸の台地上に立地している。標高は約22～28m，水田面との比高差は約４～10mである。遺跡の東側には小さな谷津を挟み高津梅屋敷遺跡が位置している。

木戸前遺跡では，今回の調査を除いてこれまでに台地縁辺部から斜面部にかけて位置する４地点において調査が実施されている。ａ地点は昭和50年度に木戸前遺跡調査会によって調査が実施され，時期不明の土坑１基と縄文土器が数片等が出土している(註１)。ｂ地点は昭和56年度に八千代市教育委員会によって調査が実施されたが，遺構・遺物は検出されなかった(註２)。また，昭和44・45年度に日本住宅公団高津団地(当時)造成に先行し，高津団地遺跡発掘調査団によって「高津遺跡」として２地点の調査が実施されている(註３)。２地点ともに遺構は検出されず，土師器が数片出土したのみであった。



第22図　木戸前遺跡ｃ地点
トレンチ配置図

今回の調査区はｃ地点である。ｃ地点はａ地点の北側の台地上平坦部に位置している。標高は27m前後である。調査区の現況は荒蕪地で，以前は畑地として使用されていたそうである。現況では粗大ゴミが捨てられていたため，遺物の散布は確認できなかった。しかし，調査区周辺では稀少であるが縄文土器・土師器等の散布を確認することができた。ｃ地点の調査面積は60㎡と狭いうえに，これまでの木戸前遺跡の調査と周辺の遺物の散布状況



第23図　木戸前遺跡ｃ地点土層断面図

から考えて，ｃ地点における遺構の分布は非常に稀薄であると想定された。

調査の方法と経過

調査は，調査区の形状に合わせて1.5m×９mのトレンチを２本設定して実施した。検出状況を確認しながら，遺構の捕捉に努め，最終的に27㎡について表土除去・遺構検出作業を行った。また，旧石器時代調査トレンチを１箇所設定し，掘削を行った。

調査期間は平成14年12月10～16日である。10日器材搬入，11日トレンチ設定，重機によるトレンチ表土除去作業，遺構検出作業，11・12日人力による旧石器時代調査トレンチ掘削作業，12日実測・撮影等記録作業，13日重機によるトレンチ埋め戻し作業，16日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序は，Ⅰ表土層(旧耕作土層)，Ⅱ暗褐色土層，Ⅲ暗黄褐色土層，Ⅳ黄褐色ソフトローム層，Ⅴ黄褐色ハードローム層，Ⅵ明黄褐色ハードローム層，Ⅶ暗褐色ハードローム層，Ⅷ暗褐色ハードローム層である。遺構検出作業はⅣ層の上面で行った。地表面から遺構検出作業面までの深さは，約0.4mである。

調査の結果，遺構・遺物は検出されなかった。

調査のまとめ

木戸前遺跡においては，これまでに４地点において調査が実施されている。しかし，遺構は時期不明の土坑が１基検出されているのみで，遺物もほとんど出土していない。このような状況から，木戸前遺跡における遺構の分布は非常に稀薄であるといえる。今回のｃ地点の調査においても遺構・遺物を検出することができなかった。遺構の分布が稀薄なうえ，調査面積が60㎡と狭いため，やむ得ない結果であったといえるであろう。

（註１）木戸前遺跡発掘調査団　1976　『千葉県八千代市木戸前遺跡発掘調査報告』
（註２）八千代市史編さん委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』　八千代市
（註３）丸子亘　1970　『千葉県八千代市高津遺跡発掘調査概報』立正大学博物館学講座研究小報４

7．保品庚塚遺跡

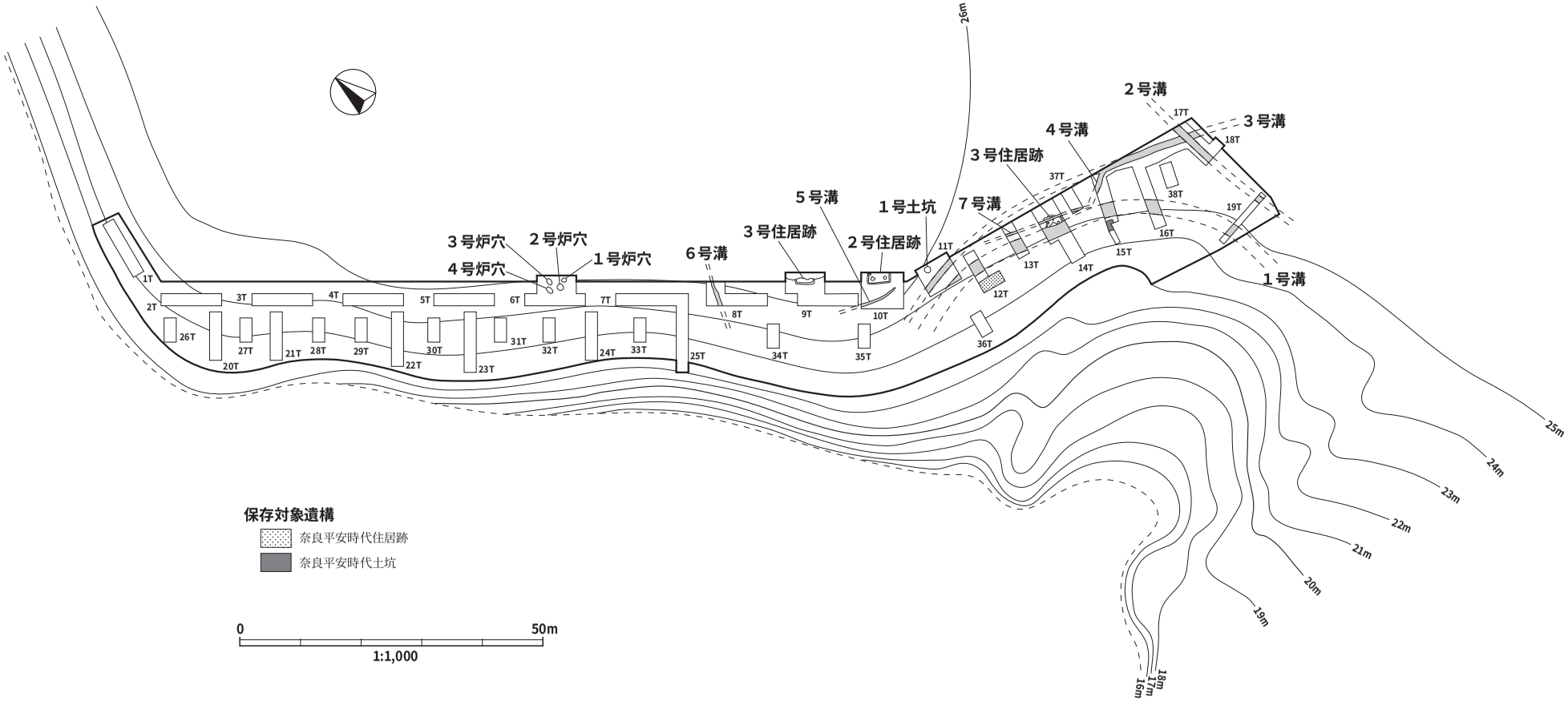
第24図　保品庚塚遺跡位置図（S＝1：5,000）

遺跡の立地と概要

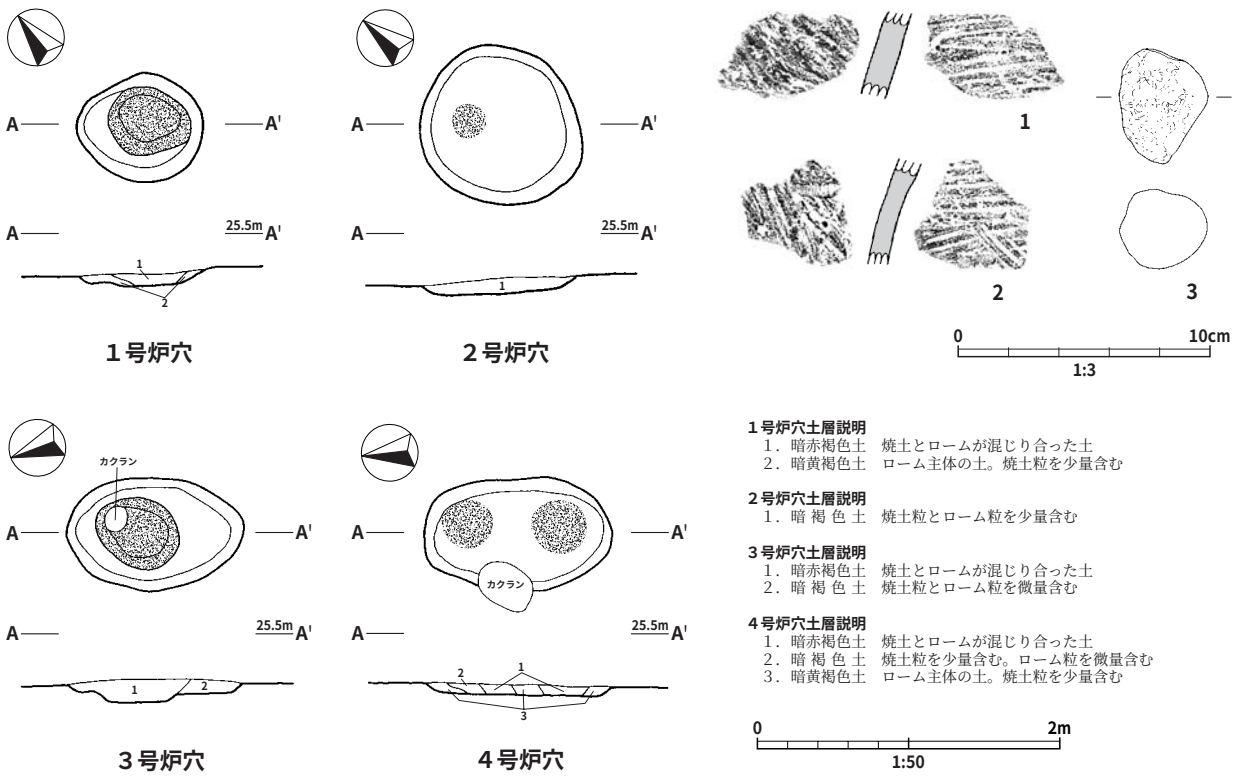
保品庚塚遺跡は，八千代市北東部，旧印旛沼南岸の舌状台地の基部に立地している。遺跡の東側と西側は旧印旛沼の低地から入り込む谷津によって開析されている。標高は約20～26m，水田面との比高差は約10～16mである。これまでに保品庚塚遺跡の調査例はなく，今回が初めての調査となる。

保品庚塚遺跡が所在する台地一帯は，畑地が広がる農村地帯である。しかし，近年，周辺においてゴルフ場や住宅団地の建設，県道の施設などが行われ，少しずつ様相が変化してきている。保品庚塚遺跡西側の谷津を挟んだ対岸の台地上には，栗谷遺跡(註１)・上谷遺跡(註２)・雷遺跡(註３)・雷南遺跡(註４)が立地している。これらの開発に伴いこれらの遺跡では，既に数次にわたって調査が実施されており，縄文時代から奈良平安時代を中心とした遺構・遺物が検出されている。

調査区は遺跡の南西端，西に谷津を臨む標高約23～26mの台地縁辺部から斜面部にかけて位置している。現況は山林であったため，現地踏査において調査区内の遺物の散布を確認することはできなかった。しかし，山林を



第25図　保品庚塚遺跡遺構配置図



１号炉穴

２号炉穴

３号炉穴

４号炉穴

１号炉穴土層説明
1．暗赤褐色土　焼土とロームが混じり合った土
2．暗黄褐色土　ローム主体の土。焼土粒を少量含む

２号炉穴土層説明
1．暗 褐 色 土　焼土粒とローム粒を少量含む

３号炉穴土層説明
1．暗赤褐色土　焼土とロームが混じり合った土
2．暗 褐 色 土　焼土粒とローム粒を微量含む

４号炉穴土層説明
1．暗赤褐色土　焼土とロームが混じり合った土
2．暗 褐 色 土　焼土粒を少量含む。ローム粒を微量含む
3．暗黄褐色土　ローム主体の土。焼土粒を少量含む

第26図　保品庚塚遺跡炉穴

伐採後天地返しが行われた調査区北側の隣接地において，縄文土器（早期後半条痕文系土器主体）と奈良平安時代土師器を中心とした遺物の散布を確認することができた。また，調査区の西側に位置する上谷遺跡においては縄文時代早期後半の炉穴群や奈良平安時代の集落跡が遺跡の主体となっている。北側隣接地の遺物の散布状況や，上谷遺跡の調査成果から考えて，今回の調査においても該期を中心とした遺構の存在が想定された。

調査の方法と経過

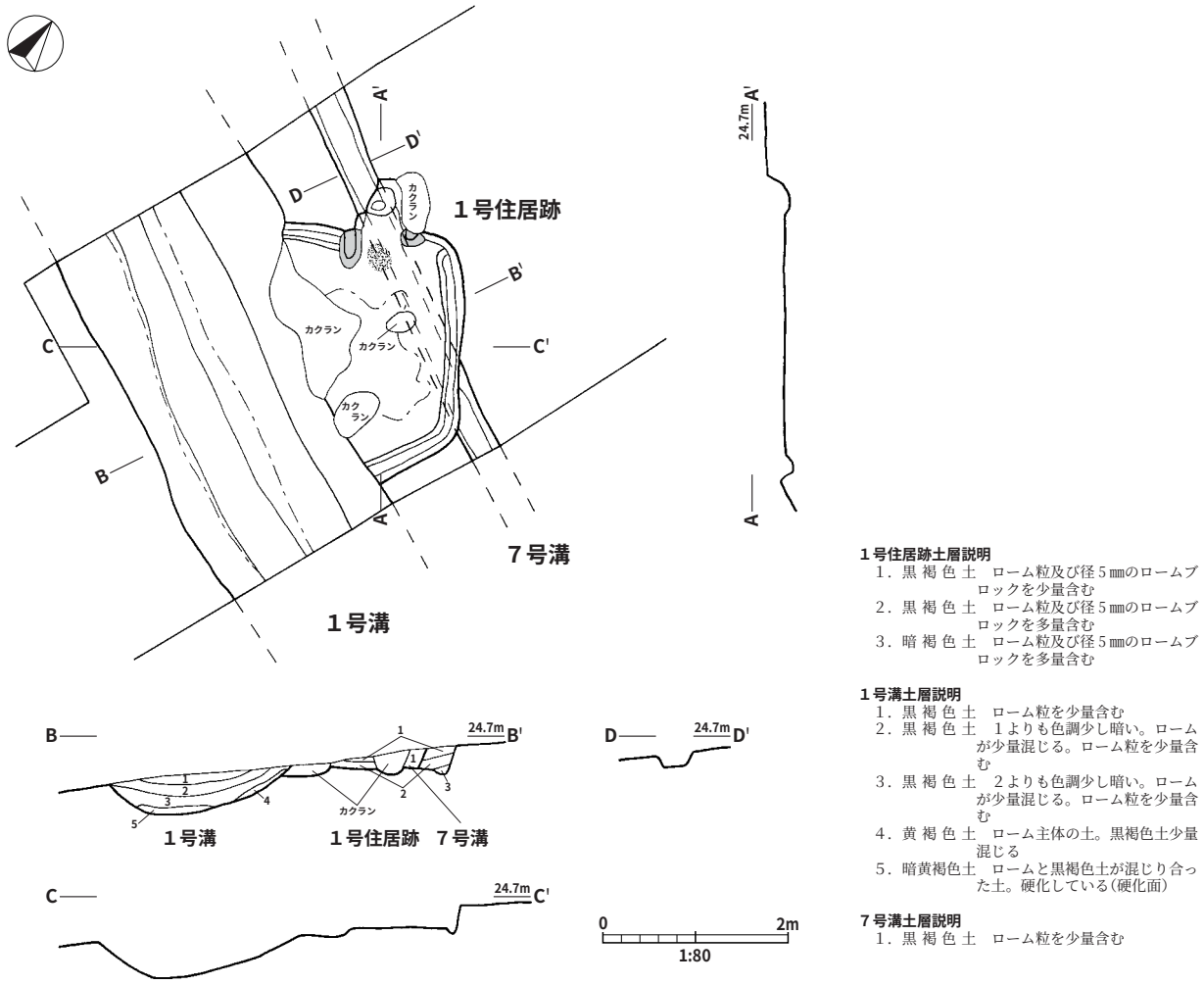
調査は，調査区の地形・形状に合わせて幅２mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら，適宜，トレンチの拡張・増設を行い，遺構の捕捉に努めた。伐採が行われていないため重機が進入できない台地斜面山林部のトレンチについては人力にて表土除去作業を行った。最終的に670㎡について表土除去・遺構検出作業を行ったが，検出された遺構が少なかったため，遺構の周辺のみトレンチを拡張し，これらの遺構の本調査も併せて行った。また，調査区の東半部（25Tより東側）の台地斜面部については造成による地形の改変を伴わないことから，事業者と協議した結果，斜面部より検出された遺構については本調査を行わず，保存することとなった。

調査期間は平成14年12月13日～平成15年２月３日である。12月13日器材搬入，12月16日トレンチ設定，12月17日～１月８日重機によるトレンチ表土除去作業，遺構検出作業，12月24日～１月21日遺構調査，１月９～24日実測・撮影等記録作業，１月21～24日人力による台地斜面部トレンチ表土除去作業，遺構検出作業，１月24日人力による台地斜面部トレンチ埋め戻し作業，１月29日～２月３日重機によるトレンチ埋め戻し作業，２月７日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序は，Ⅰ表土層，Ⅱ黒色土層，Ⅲ暗褐色土層，Ⅳ暗黄褐色土層，Ⅴ黄褐色土層（ソフトローム層）である。Ⅱ黒色土層は，主に台地斜面部のトレンチにおいてのみ確認された層である。地表面から遺構検出作業面までの深さは概ね0.4～0.6mで，遺構検出作業は主にⅣ～Ⅴ層上面で行った。

調査の結果，縄文時代炉穴４基，奈良平安時代住居跡４軒・土坑２基，近世以降溝７条を検出することができた。以下，遺構の概要について述べたい。



第27図　保品庚塚遺跡１号住居跡，１・７号溝

縄文時代

炉穴４基が検出されている。いずれも６Tからの検出である。

１号炉穴

平面形は楕円形。規模は長軸0.84m×短軸0.72m×深さ0.07mで，主軸方位はN-50 °Wである。壁は緩やかに立ち上がり，底面はほぼ平坦である。火床は浅く掘り込まれており，赤化している。遺物の出土はなかった。

２号炉穴

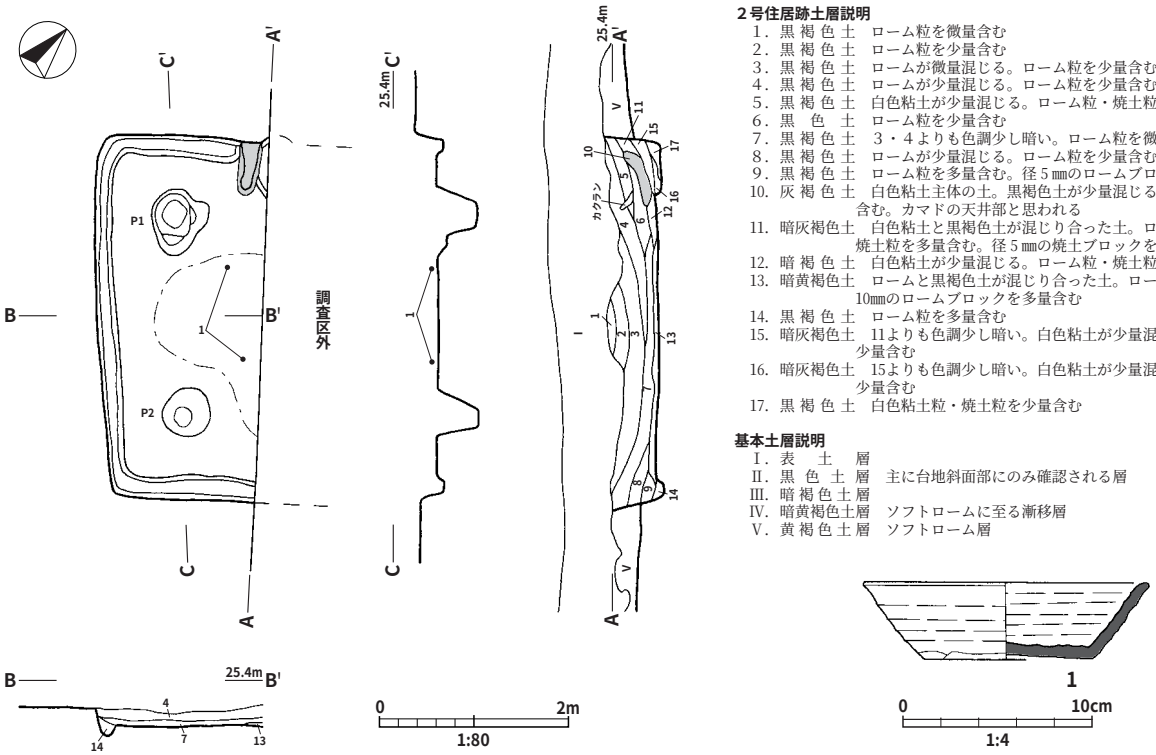
平面形は円形。規模は長軸1.1m×短軸1.02m×深さ0.07mで，主軸方位はN-6 °Wである。壁は緩やかに立ち上がり，底面はほぼ平坦である。火床は微かに赤化している。遺物は早期後半条痕文系土器の細片が12点出土している。第26図１・２は胴部片である。

３号炉穴

平面形は長楕円形。規模は長軸1.17m×短軸0.74m×深さ0.12mで，主軸方位はN-21 °Eである。壁は緩やかに立ち上がり，底面はほぼ平坦である。火床は浅く掘り込まれており，顕著に赤化・硬化している。遺物は焼礫が１点出土している（第26図３）。長さ4.6㎝，幅3.4㎝，厚さ3.1㎝，重さ49.9gで安山岩或いは流紋岩製と思われる。

４号炉穴

平面形は長楕円形。規模は長軸1.25m×短軸0.75m×深さ0.08mで，主軸方位はN-7 °Eである。壁は緩やかに立ち上がり，底面はほぼ平坦である。火床は２基検出されており，いずれも微かに赤化している。遺物の出土はなかった。



第28図　保品庚塚遺跡２号住居跡

第１表　保品庚塚遺跡２号住居跡出土遺物観察表

〔単位㎜〕

No.	器　種	口径 器高 底径	遺存度	成形・調整の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
1	須恵器 坏	151 41 89	略完形	ロクロ整形。体部下端手持ちヘラケズリ。底部回転ヘラ切り後，全面手持ちヘラケズリ。	雲母，白色粒子	良好	外）灰色 内）灰色	

奈良平安時代

住居跡４軒と土坑２基が検出されている。これらの遺構のうち台地斜面部の12Tより検出された住居跡１軒と15Tより検出された土坑１基については，事業者と協議の結果，保存されることとなったため，本調査は行わなかった。

１号住居跡

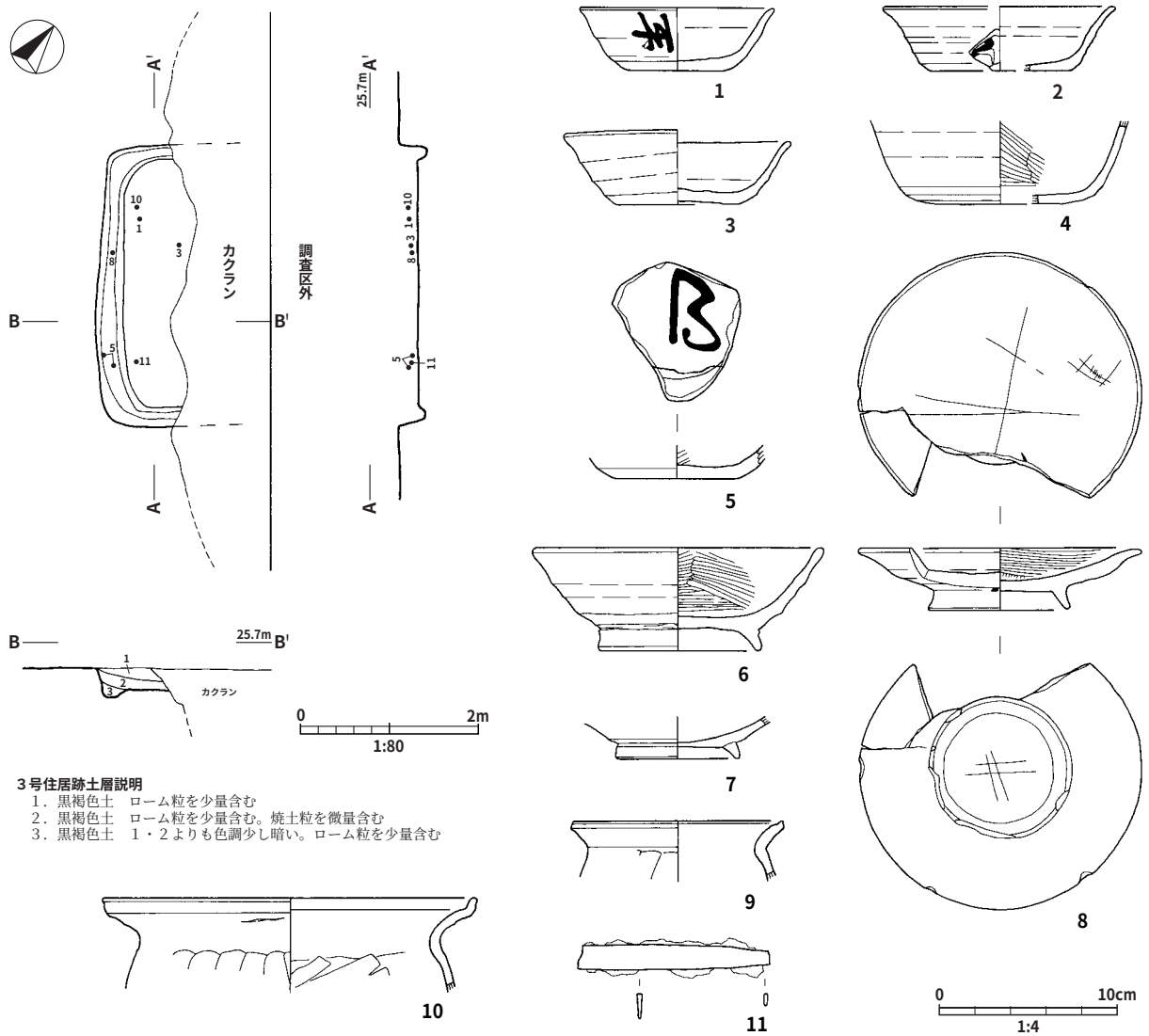
14Tより検出された。１及び７号溝に切られているため全体の約1/3を消失してしまっている。また竹根によるカクランも多い。現状では平面形は不整方形，規模は主軸〈2.75〉m×短軸〈2.15〉m×深さ0.2m，主軸方位はN-32 ºWである。覆土は自然堆積。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は暗黄褐色～暗褐色土主体の少し凹凸ある貼床で，中央部が硬化している。周溝はほぼ全周している。ピットは検出されなかった。

カマドは右袖が７号溝により切られてしまっているため，基部しか残っていない。火床に特に掘り込みはなく，床面と同じレベルで赤化している。煙道は壁を大きく掘り込んで作られており，壁の立ち上がりに深さ0.05mの浅いピットが１基掘られている。天井部は確認することができなかった。

遺物は土師器６点，須恵器２点の計８点が出土している。しかし，いずれも小破片であるため図示できるものはなかった。

２号住居跡

10Tより検出された。調査区の境界上に位置しているため，調査できたのは全体の約1/2である。現状では平面形は方形，規模は主軸3.8m×短軸〈1.8〉m×深さ0.2m，主軸方位はN-42 ºWである。覆土は自然堆積。壁は垂直



第29図　保品庚塚遺跡３号住居跡

に立ち上がる。床面はやや凹凸はあるがほぼ平坦であるといえる。黄褐色ローム土主体の貼床で，中央部が硬化している。周溝は全周している。ピットは主柱穴が２基検出された。それぞれの深さはＰ１が0.41m，Ｐ２が0.4mである。

カマドは左袖側の約1/2弱を調査することができた。火床には浅い掘り込みがあるが，現状では赤化している部分は認められなかった。煙道は壁を浅く掘り込んで作られており，垂直に立ち上がっている。天井部はセクションにおいて確認することができた。

遺物は縄文土器７点，土師器３点，須恵器21点の計31点出土している。しかし，いずれも小破片ばかりであるため，接合して図示できたものは床直から出土した須恵器坏１点のみである（第28図１）。

３号住居跡

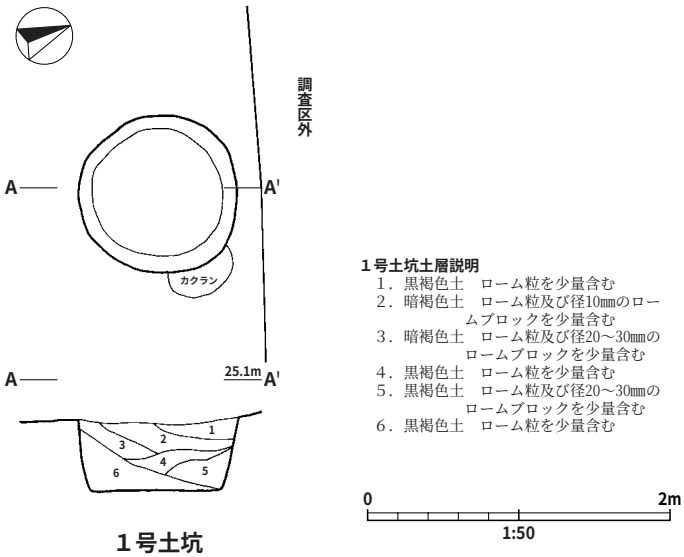
９Tより検出された。２号住居跡と同様に調査区の境界上に位置しているため，調査できたのは全体の約2/3である。しかし，大きなカクランを受けているため，実際に遺存していたのは全体の約1/3である。現状では平面形は方形，規模は主軸3.15m×短軸〈1.05〉m×深さ0.2m，主軸方位はN-39 °Wである。覆土は自然堆積。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は暗黄褐色～暗褐色土主体の平坦な貼床で，硬化している範囲は確認できなかった。周溝は全周している。ピットは検出されなかった。カマドは検出されなかったが，カクランにより消失してしまった可能性が高い。

第２表　保品庚塚遺跡３号住居跡出土遺物観察表

〔単位㎜〕

No.	器　種	口径 器高 底径	遺存度	成形・調整の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
1	土師器 坏	(110) 35 (54)	1/4	ロクロ整形。体部下端回転ヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。	雲母，白色粒子	良好	外）橙褐色 内）褐色	墨書（体部外面）「生」
2	土師器 坏	(130) 36 (78)	1/4	ロクロ整形。体部下端回転ヘラケズリ。底部回転糸切り後，回転ヘラケズリ。	雲母，白色粒子	良好	外）橙褐色 内）橙褐色	墨書（体部外面）「□」
3	土師器 坏	128 42 70	略完形	ロクロ整形。体部下端回転ヘラケズリ。底部回転糸切り後，回転ヘラケズリ。	雲母，白色粒子，赤色粒子	良好	外）褐色 内）淡橙褐色 ～暗褐色	
4	土師器 坏	— 〈46〉 (94)	底部1/6	ロクロ整形。体部下端回転ヘラケズリ。内面密なヘラミガキ。底部回転糸切り後，回転ヘラケズリ。	雲母，白色粒子	良好	外）赤褐色 内）赤褐色	
5	土師器 坏	— 〈19〉 (68)	底部1/2	ロクロ整形。体部下端回転ヘラケズリ。内面粗いヘラミガキ。底部回転糸切り後，回転ヘラケズリ。	雲母，白色粒子	良好	外）淡褐色 内）淡褐色	墨書（底部内面）「得」
6	土師器 高台付坏	(164) 58 台部径 (92)	1/2	ロクロ整形。体部下端回転ヘラケズリ。内面密なヘラミガキ。底部回転糸切り後，回転ヘラケズリ。高台部ナデ。	雲母，白色粒子	良好	外）橙褐色 ～暗褐色 内）橙褐色 ～暗褐色	
7	土師器 高台付皿	— 〈23〉 台部径 (70)	底部1/2	ロクロ整形。体部下端回転ヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ。高台部ナデ。	雲母，砂粒，白色粒子	良好	外）淡橙褐色 ～明褐色 内）淡橙褐色 ～明褐色	
8	土師器 高台付皿	160 35 台部径 80	略完形	ロクロ整形。体部下端回転ヘラケズリ。内面密なヘラミガキ。高台部ナデ後，底部密なヘラミガキ。	雲母，白色粒子	良好	外）橙褐色 内）橙褐色	墨書（体部外面）「□」 線刻（底部外面）「井」 墨書（底部内面）「□」 線刻（底部内面）「□」 線刻（底部内面）「□」
9	土師器 小型甕	(120) 〈34〉 —	口縁部1/5	口縁部横位ナデ。胴部外面縦位ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	雲母，砂粒，白色粒子，黒色粒子	良好	外）赤褐色 内）赤褐色	
10	土師器 甕	(212) 〈53〉 —	口縁部1/5	口縁部横位ナデ。胴部外面縦位ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	長石，雲母，砂粒，白色粒子	良好	外）赤褐色 内）暗赤褐色	
11	鉄製品	刀子。長さ〈108〉㎜。幅15㎜。厚さ3㎜。重さ21.0g。						

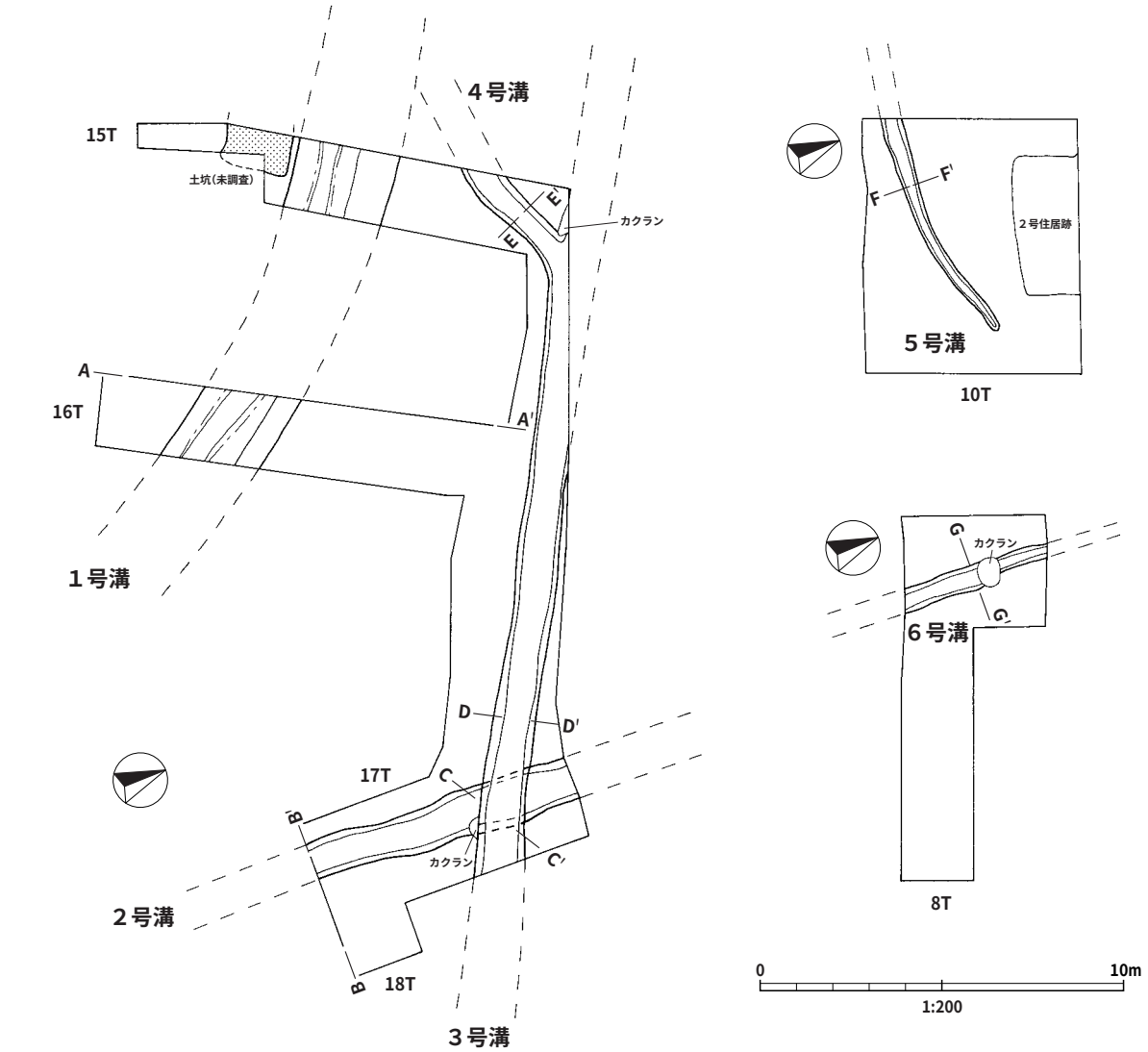
遺物は縄文土器17点，土師器88点，須恵器12点，鉄製品１点の計118点出土している。本調査を行った住居跡３軒の中で最も遺物量が多い。墨書及び線刻が確認できる土器も４点出土している（第29図１・２・５・８）。５の「得」は，本遺跡の西側に位置する上谷遺跡において主体となって出土する文字の一つである。

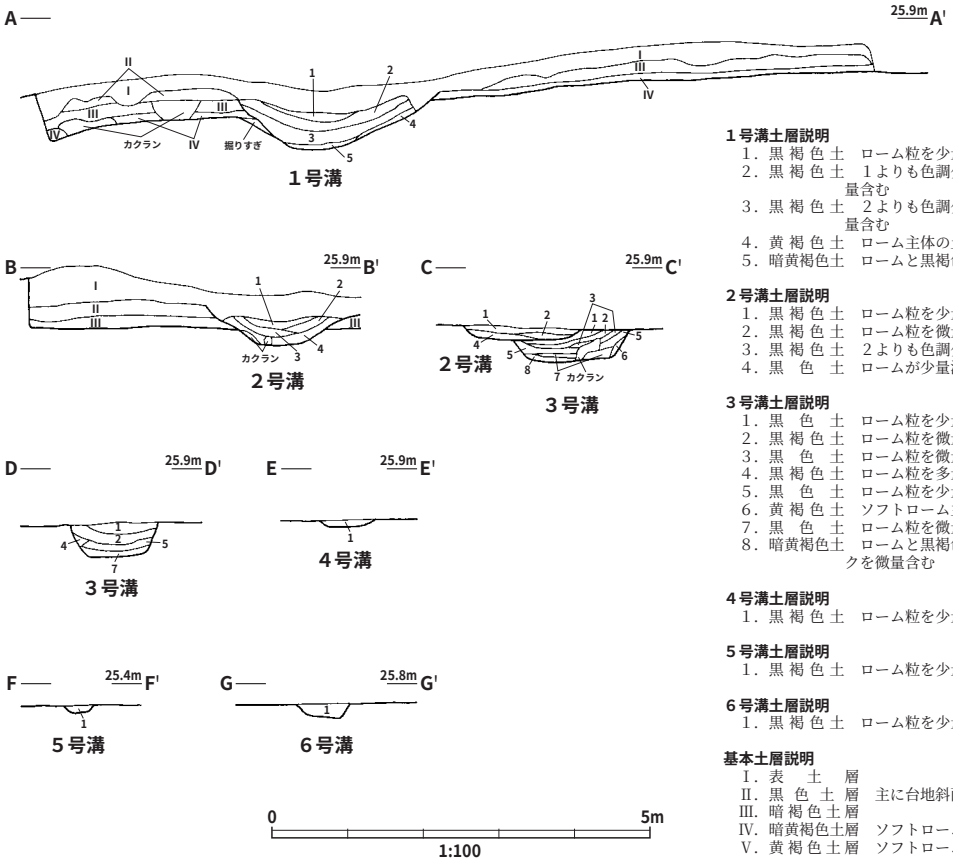


第30図　保品庚塚遺跡１号土坑

１号土坑

11Tより検出された。調査区の境界際に位置している。平面形は円形，規模は長軸1.06m×短軸1.05m×深さ0.46mである。覆土は人為的な埋め戻しによる堆積である。壁は垂直に立ち上がり，底面は平坦である。柱痕は検出されなかったが，覆土・形状等から判断して掘立柱建物跡の柱穴である可能性が高い。おそらく他の柱穴は北側の調査区外に展開しているものと思われる。遺物の出土はなかった。





1号溝土層説明

1．黒 褐 色 土　ローム粒を少量含む
2．黒 褐 色 土　1よりも色調少し暗い。ロームが少量混じる。ローム粒を少量含む
3．黒 褐 色 土　2よりも色調少し暗い。ロームが少量混じる。ローム粒を少量含む
4．黄 褐 色 土　ローム主体の土。黒褐色土少量混じる
5．暗黄褐色土　ロームと黒褐色土が混じり合った土。硬化している(硬化面)

2号溝土層説明

1．黒 褐 色 土　ローム粒を少量含む
2．黒 褐 色 土　ローム粒を微量含む
3．黒 褐 色 土　2よりも色調少し暗い。ローム粒を微量含む
4．黒　色　土　ロームが少量混じる。ローム粒を少量含む

3号溝土層説明

1．黒　色　土　ローム粒を少量含む
2．黒 褐 色 土　ローム粒を微量含む
3．黒　色　土　ローム粒を微量含む
4．黒 褐 色 土　ローム粒を多量含む
5．黒　色　土　ローム粒を少量含む。径10㎜のロームブロックを微量含む
6．黄 褐 色 土　ソフトローム主体の土
7．黒　色　土　ローム粒を微量含む
8．暗黄褐色土　ロームと黒褐色土が混じり合った土。径10㎜のロームブロックを微量含む

4号溝土層説明

1．黒 褐 色 土　ローム粒を少量含む。径5㎜のロームブロックを微量含む

5号溝土層説明

1．黒 褐 色 土　ローム粒を少量含む

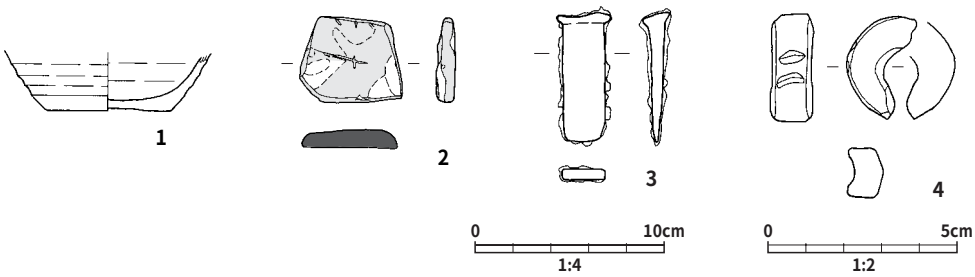
6号溝土層説明

1．黒 褐 色 土　ローム粒を少量含む

基本土層説明

Ⅰ．表　土　層
Ⅱ．黒 色 土 層　主に台地斜面部にのみ確認される層
Ⅲ．暗 褐 色 土 層
Ⅳ．暗黄褐色土層　ソフトロームに至る漸移層
Ⅴ．黄 褐 色 土 層　ソフトローム層

第31図　保品庚塚遺跡1・2・3・4・5・6号溝



第32図　保品庚塚遺跡溝出土遺物

第３表　保品庚塚遺跡溝出土遺物観察表

〔単位㎜〕

No.	器　種	口径 器高 底径	遺存度	成形・調整の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
1	土師器 坏	— 30 (66)	底部1/2	ロクロ整形。体部下端回転ヘラケズリ。底部回転糸切り後，回転ヘラケズリ。	雲母，白色粒子	良好	外）橙褐色 ～褐色 内）褐色	３号溝出土
2	土製品	須恵器甕転用砥石。長さ45㎜。幅54㎜。厚さ10㎜。重さ27.4g。						５号溝出土
3	鉄製品	楔。長さ69㎜。幅18～27㎜。厚さ6㎜。重さ63.0g。						２号溝出土
4	土製品	玦状耳飾。長さ27㎜。幅10㎜。厚さ10㎜。重さ5.5g。周縁に刻目有り。						３号溝出土

近世以降

溝７条が検出されている。

１号溝

11・12・13・14・15・16・19Tより検出された。現地踏査において，表土に深さ0.2～0.3m程の溝状の窪みを確認できたことから，調査前より所在が想定されていた遺構である。この溝は南側の小さな谷津頭に沿って弧を描くように延びている。１号住居跡と重複している。14・15・16Tにおいて掘削調査を行った。規模は幅2.0～2.9m，深さ0.4～0.67mである。壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。底面は平坦で，硬化面が認められることから道としても利用されていたようである。遺物は縄文土器１点，土師器51点，須恵器16点の計68点出土しているが，いずれも小破片であるため図示できるものはなかった。

２号溝

17・18・19Tより検出された。東側に高さ0.2～0.3mの土塁状の盛土を伴い，既存の農道に平行して延びている。３号溝と重複している。３号溝よりも掘り込みは浅いが，時期的には３号溝よりも新しい。17・18Tにおいて掘削調査を行った。規模は幅1.0～1.4m，深さ0.1～0.2mである。壁は緩やかな傾斜で立ち上がり，底面は平坦である。遺物は縄文土器２点，土師器２点，須恵器２点，鉄製品１点の計７点出土している。第32図３は鉄製品の楔である。

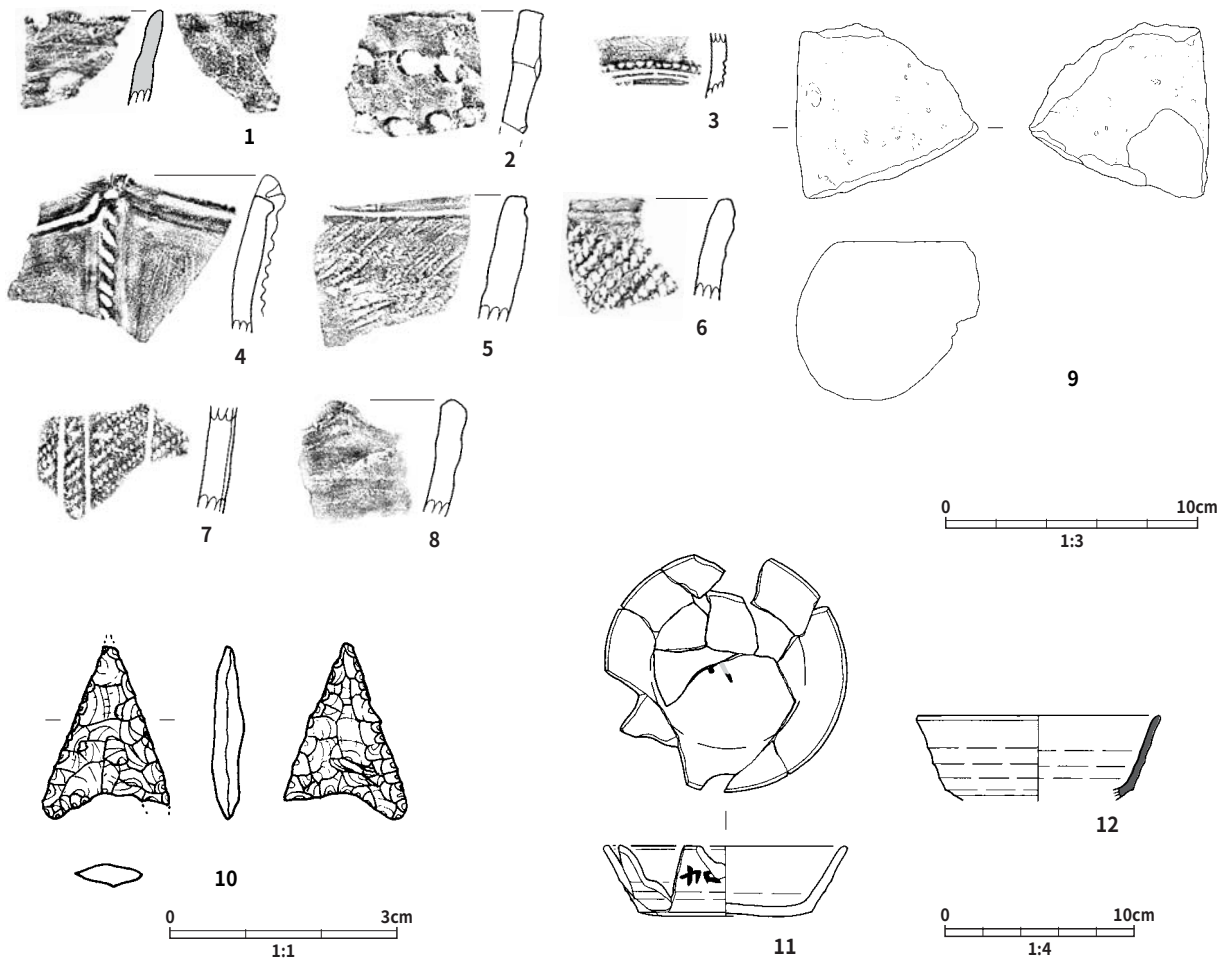
３号溝

11・15・16・17Tより検出された。１号溝に平行して延びている。２及び４号溝と重複している。時期的には２号溝よりも古く，４号溝との新旧関係は不明である。15・16・17Tにおいて掘削調査を行った。規模は幅1.0～1.4m，深さ0.25～0.5mで，断面は逆台形を呈している。底面は平坦である。遺物は縄文土器１点，土師器６点，土製品１点の計８点出土している。第32図１は土師器の坏である。４は土製の玦状耳飾である。縄文時代前期後半の所産で1/2弱を欠損している。

４号溝

15Tより検出された。３号溝と重複しているが新旧関係は不明である。規模は幅0.8m，深さ0.1mである。壁は緩やかな傾斜で立ち上がり，底面は平坦である。遺物は土師器２点が出土しているが，小破片なので図示できるものはなかった。

５号溝



第33図　保品庚塚遺跡トレンチ出土遺物

第４表　保品庚塚遺跡トレンチ出土遺物観察表

〔単位㎜〕

No.	器　種	口径 器高 底径	遺存度	成形・調整の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
11	土師器 坏	130 37 92	略完形	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ。	雲母，白色粒子	良好	外）橙褐色 内）橙褐色	墨書（体部外面）「加」 墨書（底部内面）「□」
12	須恵器 坏	(130) 45 —	口縁部1/4	ロクロ整形。体部下端回転ヘラケズリ。	白色粒子	良好	外）黒灰色 内）暗灰色	

10Tより検出された。浅い溝であるため途中で消失してしまっている。規模は幅0.25～0.58m，深さ0.03～0.18mである。壁は緩やかな傾斜で立ち上がり，底面は平坦である。遺物は縄文土器１点，土師器１点，須恵器１点，土製品１点の計４点出土している。第32図２は須恵器甕転用の砥石である。

６号溝

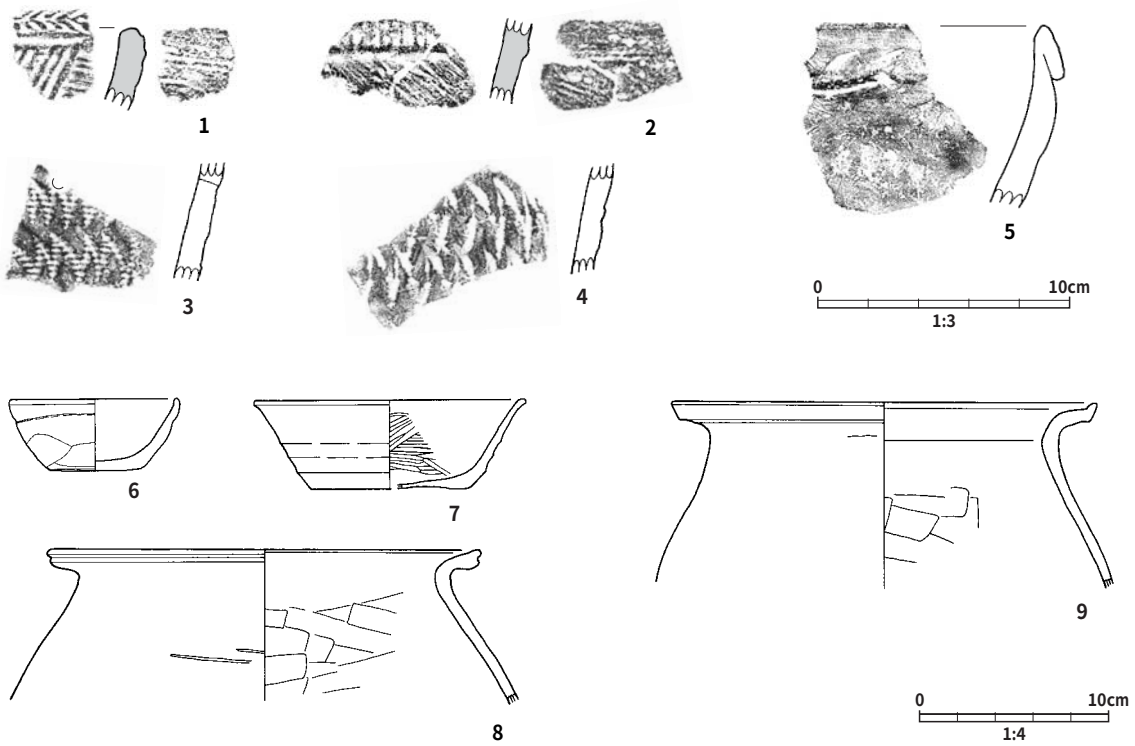
８Tより検出された。規模は幅0.35～0.7m，深さ0.05～0.2mである。壁は急傾斜で立ち上がり，底面は平坦である。遺物の出土はなかった。

７号溝

13・14・37Tより検出された。14Tの１号住居跡と重複している。１号住居跡と一緒に掘削調査を行った。規模は幅0.4m，深さ0.1～0.2mで，断面は逆台形を呈している。底面は平坦である。遺物の出土はなかった。

トレンチ出土遺物

第33図１～８は縄文土器である。１は早期後半条痕文系土器の口縁部である。２は前期浮島式である。輪積痕



第34図　保品庚塚遺跡表採遺物

第５表　保品庚塚遺跡表採遺物観察表

〔単位㎜〕

No.	器　種	口径 器高 底径	遺存度	成形・調整の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
6	土師器 坏	(90) 38 (48)	1/2	ナデ後，体部手持ちヘラケズリ。体部に輪積痕を残す。内面ナデ。底部全面手持ちヘラケズリ。	雲母，砂粒，白色粒子，赤色粒子	良好	外）褐色 内）褐色	
7	土師器 坏	(144) 47 (84)	1/5	ロクロ整形。体部下端回転ヘラケズリ。内面密なヘラミガキ。底部回転糸切り後，回転ヘラケズリ。	雲母，白色粒子	良好	外）暗橙褐色 内）淡橙褐色 ～暗褐色	
8	土師器 甕	(230) 〈81〉 —	口縁部1/8	口縁部横位ナデ。胴部外面ナデ。内面ヘラナデ。	長石，雲母，砂粒，白色粒子	良好	外）橙褐色 内）淡橙褐色	
9	土師器 甕	(216) 〈98〉 —	口縁部1/4	口縁部横位ナデ。胴部外面ナデ。内面ヘラナデ。	長石，雲母，白色粒子	良好	外）淡褐色 内）淡褐色	

に沿って凹凸文が施されている。３は中期初頭の土器である。刺突列と半截竹管による沈線が施文されている。４は後期堀之内１式である。口唇部に沈線が巡り，胴部には垂下隆帯に刻目が施文されている。５～７は後期前半の土器である。５はＬＲの縄文と口縁部に横位の沈線，６はＬＲの縄文，７はＬＲの縄文に縦位の沈線が施文されている。８は無文の土器である。９・10は石器である。９は石皿片である。長さ70㎜，幅72㎜，厚さ63㎜，重さ365.1gで，石質は安山岩である。10は石鏃である。長さ23㎜，幅17㎜，厚さ3㎜，重さ0.9gで，石質は黒曜石である。11は土師器の坏である。２箇所に墨書が認められる。12は須恵器の坏である。

表採遺物

ここで図示する遺物は調査区の北側隣接地において表採した遺物である。第34図１～５は縄文土器である。１・２は早期野島式である。微隆起線によって区画し，区画内に沈線を充填している。また１は口唇部に刻目文列が施されている。３・４は前期浮島式である。３は有肋の波状貝殻文である。補修孔が認められる。４は無肋の波状貝殻文である。５は前期後半の口縁部に輪積痕を残す土器である。６・７は土師器の坏，８・９は土師器の甕である。

調査のまとめ

今回の調査では，調査前の想定通り，縄文時代及び奈良平安時代を中心とした遺構を検出することができた。

縄文時代の遺構は，６Tより炉穴４基を検出した。遺物は２号炉穴より早期後半条痕文系土器が出土している。他の炉穴からは焼けた礫が１点出土しているのみで，時期を判断するような遺物の出土はなかったが，検出状況から考えて他３基の炉穴も２号炉穴と同じく早期後半条痕文期の所産と判断される。

奈良平安時代の遺構は，住居跡４軒，土坑２基を検出した。このうち台地斜面部より検出された住居跡１軒と土坑１基は保存が決定したため本調査は行わなかった。本調査を行ったのは住居跡３軒と土坑１基である。１号住居跡は１号溝に全体の約1/3を切られており，カクランも多い。遺物は小破片が数点出土したのみであるため，帰属時期の判断はできなかった。２号住居跡は調査区の境界線上に位置しているため，全体の約1/2しか調査できなかった。遺物は少量しか出土していないが，概ね８世紀後半から９世紀初めに帰属するものと思われる。３号住居跡は２号住居跡と同様に調査区の境界線上に位置している。そのうえ大きなカクランも受けているため，遺存していたのは全体の約1/3である。カマドは検出されなかったものの，出土遺物から９世紀中頃の所産と判断される。１号土坑も調査区の境界線際に位置している。覆土や形状から判断して，掘立柱建物跡の柱穴である可能性が高いと思われる。遺物の出土がないため帰属時期は不明である。今回調査できた遺構のうち，遺構全体を調査できたのは１号住居跡のみであった。他の遺構は調査区の境界線上に位置しているため，遺構の一部しか調査できなかった。

近世以降の遺構は，溝７条を検出した。出土した遺物は全て混入遺物であるため，詳細な帰属時期は不明である。性格は境界溝・根切り溝的な用途が考えられる。

保品庚塚遺跡は今回が初めての調査であった。調査区は台地縁辺から斜面部という比較的遺構が検出されにくいという立地ではあったが，縄文時代及び奈良平安時代を中心とした多くの成果を得ることができた。今回調査した遺構のほとんどが台地縁辺部の調査区境界際からの検出ということから判断して，遺跡の主体は台地平坦部の調査区北側隣接地に展開していると思われる。今後調査事例の増加により，次第に遺跡の様相も明らかになっていくものと思われる。上谷遺跡などの周辺の遺跡を考慮しながら，その展開を分析していきたい。今後の調査が期待される。

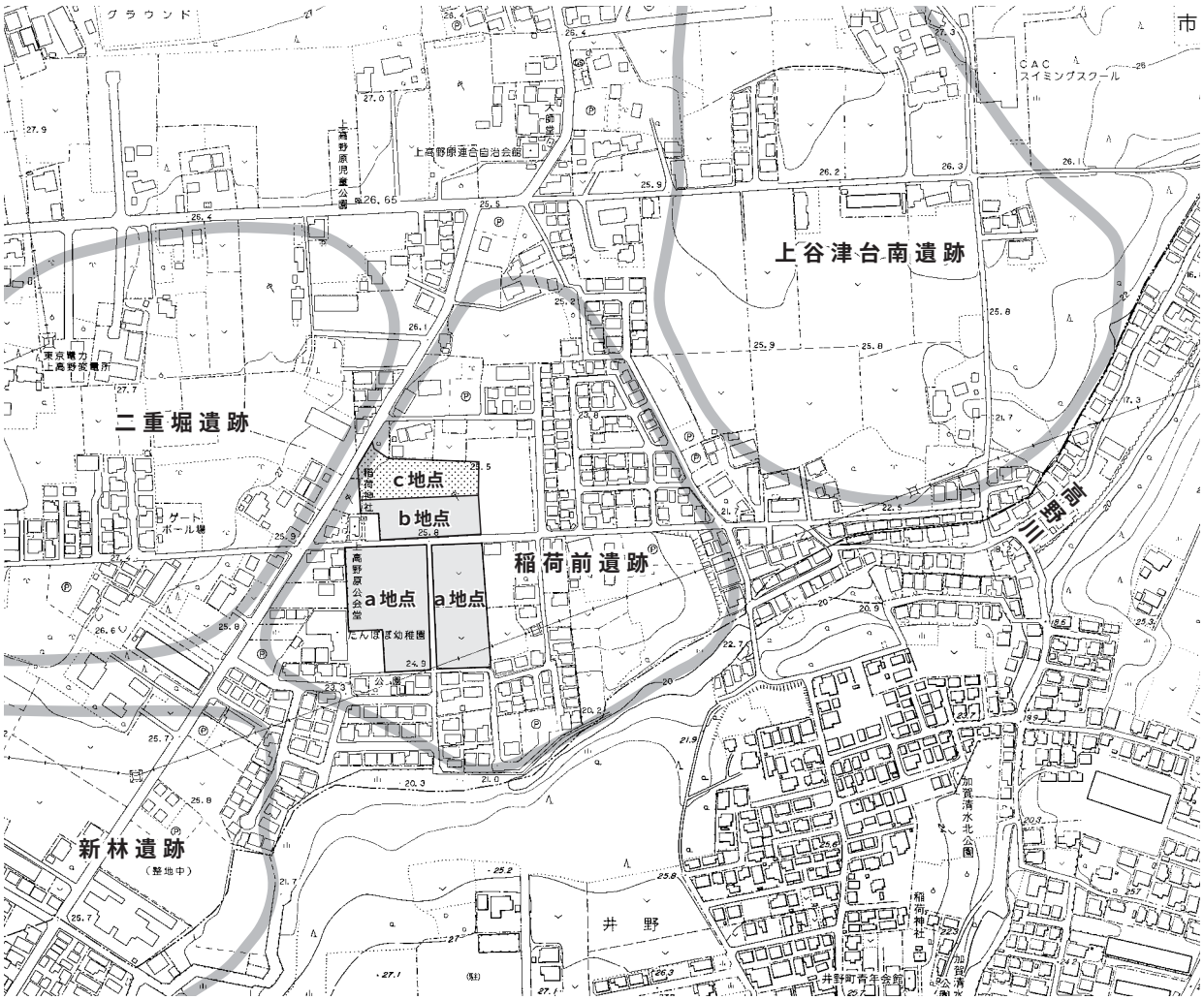
（註１）八千代市遺跡調査会　2001　『千葉県八千代市栗谷遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　―第１分冊―』

（註２）八千代市遺跡調査会　2001　『千葉県八千代市上谷遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　―第１分冊―』

（註３）八千代市教育委員会　1995　『平成６年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』
財団法人千葉県文化財センター　2000　『主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査報告書　八千代市雷遺跡・雷南遺跡』

（註４）八千代市教育委員会　1997　『八千代市埋蔵文化財調査年報　―平成７年度版―』
財団法人千葉県文化財センター　2000　『主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査報告書　八千代市雷遺跡・雷南遺跡』

8．稲荷前遺跡ｃ地点

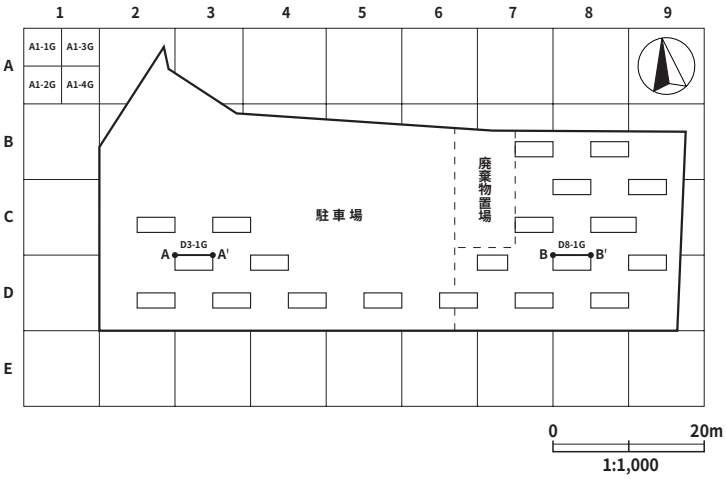


第35図　稲荷前遺跡位置図（Ｓ＝1：5,000）

遺跡の立地と概要

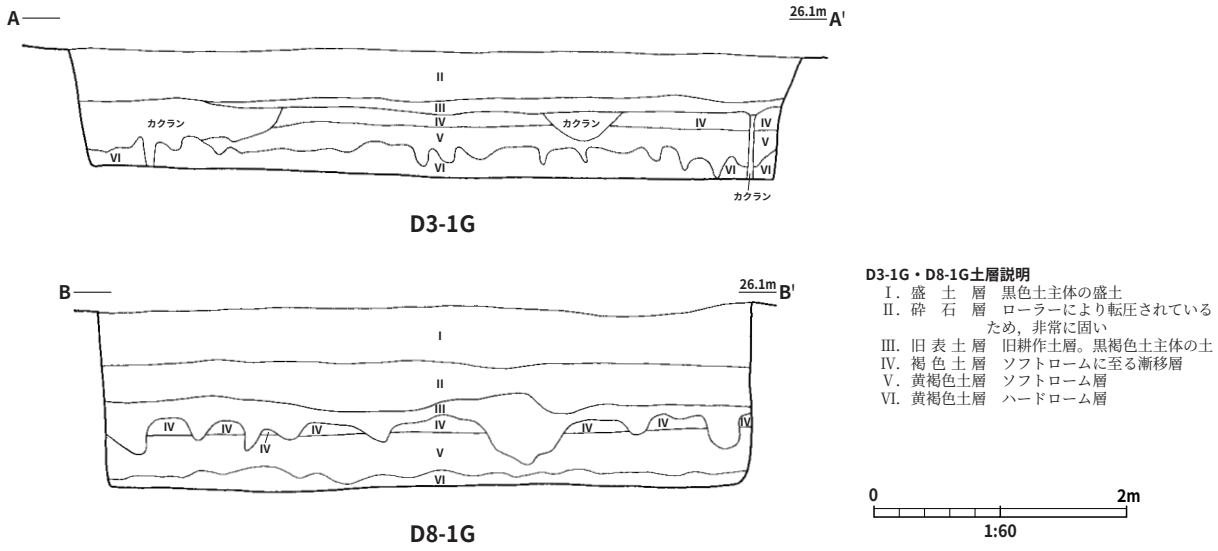
稲荷前遺跡は，八千代市と佐倉市の市境を流れる高野川(小竹川)西岸の台地上に立地している。標高は約20～26m，水田面との比高差は約４～10mである。

稲荷前遺跡の立地する台地上一帯は「上高野原」と呼ばれ，近年宅地造成などの開発が盛んな地域である。これらの開発に伴い稲荷前遺跡に隣接する上谷津台南遺跡・二重堀遺跡・新林遺跡では，数地点にわたって調査が実施されており，縄文時代を中心に旧石器時代から近世の多岐に至る遺構・遺物が検出されている。



第36図　稲荷前遺跡ｃ地点トレンチ配置図

稲荷前遺跡においても既に２地点において発掘調査が実施されている。ａ地点は台地上平坦部に位置している(註１)。平成10年度に八千代市教育委員会によって調査が実施され，縄文時代早期炉穴１基，奈良平安時代方形周溝遺構１基，時期不明土坑１基が検出されている。ｂ地点はａ地点の北側の台地上平坦部に位置している(註



第37図　稲荷前遺跡ｃ地点土層断面図

２)。平成11年度に八千代市教育委員会によって調査が実施され，縄文時代土坑２基が検出されている。

今回の調査区はｃ地点である。ｃ地点はｂ地点の北側の台地上平坦部に位置している。以前は畑地であったが，現在は調査区全体にわたって盛土・整地がされている。現況では平坦であるが，旧地形は南東に向かって緩やかに傾斜していたそうである。調査区の現況は西側が砕石敷きの駐車場，東側が荒蕪地で，一部が廃棄物置場となっている。現況での標高は26m前後である。今回のｃ地点の調査では，ａ及びｂ地点の調査結果から，縄文時代の遺構の存在が想定された。

調査の方法と経過

調査は，調査区の形状に合わせて10mのグリッド(方眼)を組んだのち，調査中も使用している駐車場の一部と廃棄物置場を除き，これに平行する形で２m×５mのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら，適宜，トレンチの増設を行い，遺構の捕捉に努めた。最終的に200㎡について表土除去・遺構検出作業を行った。

調査期間は平成15年２月５～14日である。５日器材搬入，トレンチ設定，５～10日重機によるトレンチ表土除去作業，遺構検出作業，５～12日実測・撮影等記録作業，14日重機によるトレンチ埋め戻し作業，器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序は，Ⅰ盛土層，Ⅱ砕石層，Ⅲ旧表土層(旧耕作土層)，Ⅳ褐色土層，Ⅴ黄褐色土層(ソフトローム層)，Ⅵ黄褐色土層(ハードローム層)である。遺構検出作業はⅤ層の上面で行った。なお，Ⅰ層は東側の荒蕪地のみで確認でき，西側の駐車場ではⅡ砕石層上面が地表面(駐車面)となっている。盛土の厚さは東側がⅠ・Ⅱ層合わせて約0.5～0.8m，西側がⅡ層のみで約0.2～0.6mある。地表面から遺構検出作業面までの深さは，東側が約0.7～1.1m，西側が約0.7～0.9mである。

調査の結果，遺構・遺物は検出されなかった。

調査のまとめ

今回の調査では遺構・遺物を検出することはできなかった。調査区周辺は遺構・遺物とも稀薄な地域であるといえる。遺跡の主体は別の地点にあるのであろう。上高野原地区の遺跡群の中でも高野川(小竹川)水系の稲荷前遺跡や上谷津台南遺跡は遺構・遺物の分布が稀薄な地域であり，今回の調査もその傾向を裏付ける形となったといえる。

(註１）八千代市教育委員会　2002　『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書１』
(註２）八千代市教育委員会　2000　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成12年度』

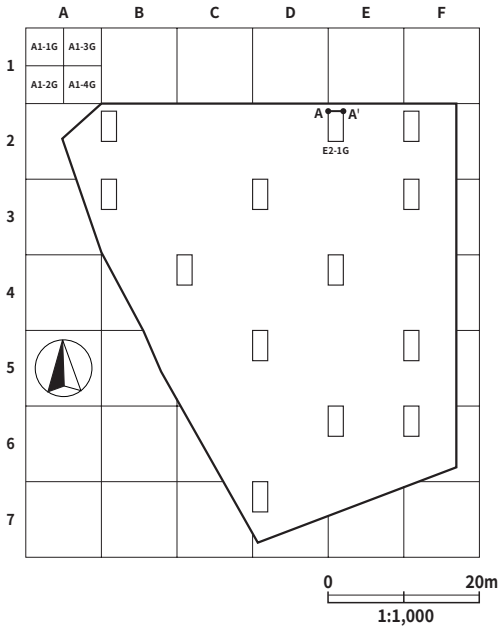
９．高津梅屋敷遺跡ｂ地点

遺跡の立地と概要

高津梅屋敷遺跡は，八千代市南西部，高津川支流の北岸の台地上に立地している（第21図）。標高は約21～28m，水田面との比高差は約５～12mである。遺跡の西側には小さな谷津を挟み木戸前遺跡が位置している。

高津梅屋敷遺跡では，昭和53年度に高津梅屋敷遺跡調査会によってａ地点の調査が実施されている（註１）。ａ地点は高津梅屋敷遺跡の西端，高津川の支流から入り込む小谷津を西に臨む台地縁辺部に位置している。遺構は縄文時代と思われる土坑１基，遺物は縄文土器が数点出土している。

今回の調査区はｂ地点である。ｂ地点は高津川の支流から北に入り込む谷津の奥部に位置している。現況は谷津を盛土して埋め立てた畑地で，南に向かって緩やかに傾斜している。標高は約24～25mである。調査区周辺では稀少であるが縄文土器・土師器等の遺物の散布が確認されている。しかし，谷津という立地から考えて，ｂ地点における遺構の分布は非常に稀薄であると想定された。



第38図　高津梅屋敷遺跡ｂ地点トレンチ配置図

調査の方法と経過

調査は，調査区の形状に合わせて10mのグリッド（方眼）を組んだのち，これに平行する形で２m×４mのトレンチを設定して実施した。

調査期間は平成15年２月19～21日である。19日器材搬入，トレンチ設定，19・20日重機によるトレンチ表土除去作業，遺構検出作業，20日実測・撮影等記録作業，重機によるトレンチ埋め戻し作業，21日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の旧地形は谷津であるが，現況では谷津を盛土して畑地として利用されている。調査区の基本層序は，Ⅰ表土層（現耕作土層），Ⅱ盛土層，Ⅲ旧表土層（旧耕作土層），Ⅳ暗褐色土層，Ⅴ暗黄褐色土層，Ⅵ黄褐色土層（ソフトローム層）である。盛土される以前も畑地として利用されていたため，深耕によりⅢ層下がⅥ層となるトレンチも一部に見られた。遺構検出作業はⅥ層の上面で行った。

調査区は南から入り込む谷津を盛土して埋め立てられている。そのため，北側の方が盛土の堆積が薄く，旧地形が確認しやすいと考え，調査区北端のトレンチから重機による表土除去作業を開始した。F2-1Gでは谷津東側の台地斜面を地表から1.4mの深さで確認することができた。しかし，B2-1G及びE2-1Gでは盛土がⅠ・Ⅱ層を合わせて約2.2～2.4m，地表から遺構検出作業面までの深さが約2.8～3.1mあり，予想していた以上に盛土が厚く堆積していることがわかった。盛土の状況を把握するため，トレンチの間隔をあけて南に向かってトレンチの表土除去作業を行っていったが，盛土の堆積は2.5m以上とさらに厚くなり，地表から遺構検出作業面までの深さは３m以上とさらに深くなった。そして調査区南端のD7-1Gにいたっては，地表面から約３m掘削したがⅢ旧表土層を確認することはできなかった。

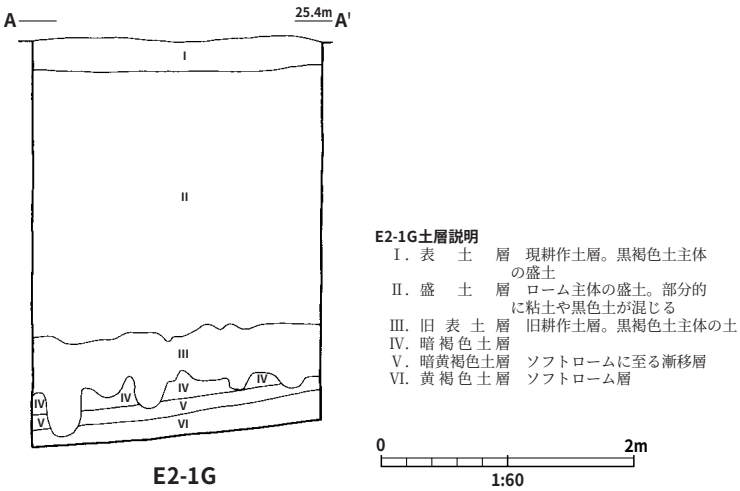
最終的に13箇所のトレンチを掘削した時点で，調査区においては谷津という立地から遺構の分布は非常に稀薄であり，遺構が検出される可能性は非常に低いと判断した。またF2-1Gを除いて，地表から遺構検出作業面までは2.8m以上も深さがあるためトレンチ壁の崩落など作業上の危険も考えられ，前述した理由と作業の安全面を

考慮して，これ以上の重機によるトレンチの表土除去作業は行わなかった。

最終的に104㎡について表土除去・遺構検出作業を行ったが，遺構・遺物は検出されなかった。

調査のまとめ

今回調査したｂ地点は，高津梅屋敷遺跡東端の谷津の奥部に位置している。調査の結果，遺構・遺物を検出することはできなかった。谷津という立地からやむ得ない結果であったと考えている。

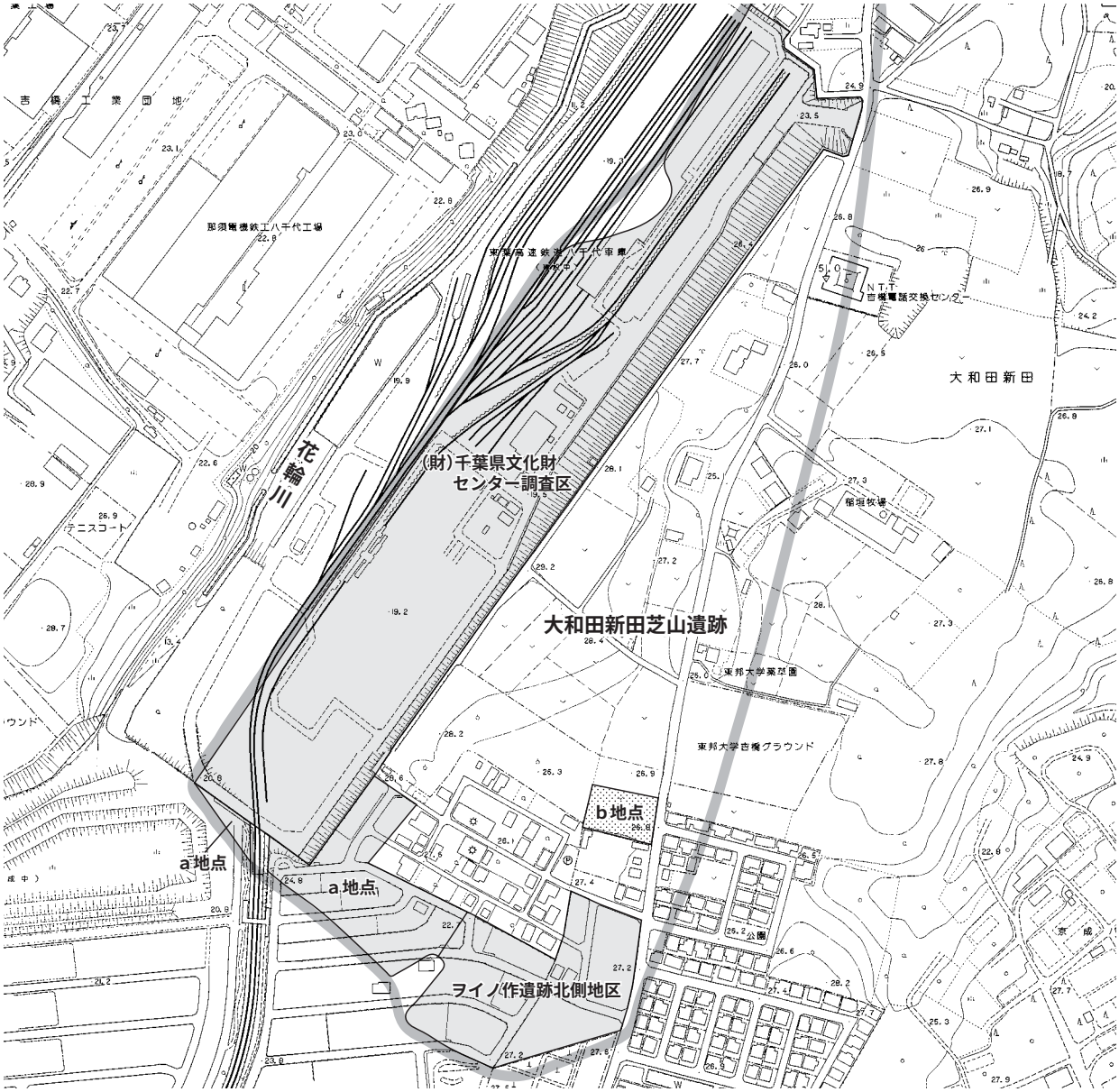


第39図　高津梅屋敷遺跡ｂ地点土層断面図

今回の調査も含めて高津梅屋敷遺跡では２地点，西側に隣接する木戸前遺跡においては５地点の調査が実施されている（註２）。しかし，いずれも縄文時代と時期不明の土坑がそれぞれ１基検出されているのみで，遺物もほとんど出土していない。また，木戸前遺跡の西側に位置する下船田遺跡においても６地点が調査されているが，遺構は検出されておらず，遺物もほとんど出土していない（註３）。高津川支流の北岸に位置するこれらの遺跡の共通の傾向として，遺構・遺物の分布が稀薄であるということがいえるであろう。

（註１）梅屋敷遺跡発掘調査団　1979　『八千代市梅屋敷遺跡』
（註２）本書19頁を参照
（註３）本書17頁を参照

10. 大和田新田芝山遺跡ｂ地点

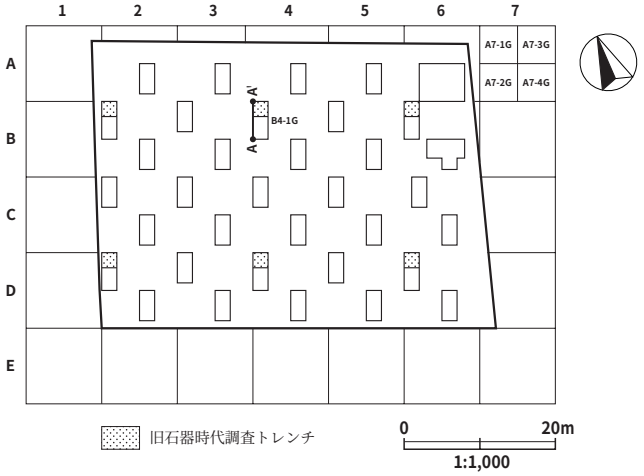


第40図　大和田新田芝山遺跡位置図（S＝1：5,000）

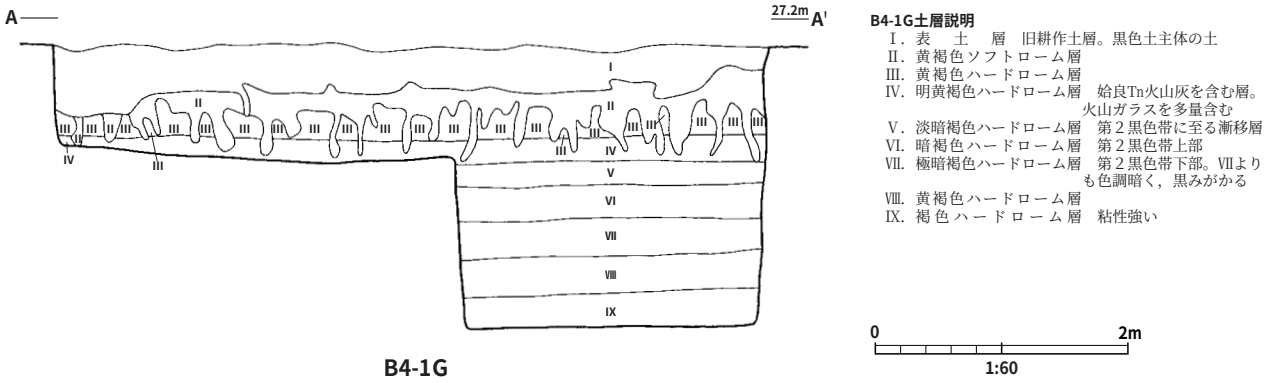
遺跡の立地と概要

大和田新田芝山遺跡は，八千代市西部，桑納川の支流である花輪川東岸の台地上に立地している。標高は約22～29m，水田面との比高差は約９～14mである。また，遺跡の南からは小さな谷津が入り込んでいる。

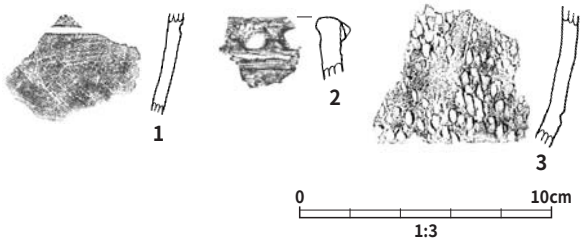
大和田新田芝山遺跡では，今回の調査を除いてこれまでに３地点において調査が実施されている。昭和59～62年度に財団法人千葉県文化財センターによって行われた東葉高速鉄道の車庫引き込み線及び車庫用地部分の調査（註１）と，昭和61年度に土地区画整理事業に先行して八千



第41図　大和田新田芝山遺跡ｂ地点トレンチ配置図



第42図　大和田新田芝山遺跡ｂ地点土層断面図



第43図　大和田新田芝山遺跡ｂ地点出土遺物

代市西八千代遺跡群調査会によって行われたａ地点（註２）及びヲイノ作遺跡北側地区（註３）の調査である。県文化財センターの調査においては，旧石器時代遺物集中地点19箇所，縄文時代住居跡３軒（前・中・後期各１軒）・陥穴状遺構44基，平安時代住居跡８軒・製鉄炉１基等が検出されている。ａ地点の調査においては，縄文時代住居跡２軒（前期）・陥穴状遺構５基，平安時代住居跡１軒等が検出されている。ヲイノ作遺跡北側地区の調査においては，縄文時代住居跡１軒（後期）・土坑１基が検出されている。

今回の調査区はｂ地点である。ｂ地点は花輪川から南東に入り込む谷津から北に派生した小谷津の最奥部，東側台地上に位置している。標高は27m前後である。県文化財センター調査区とａ地点はこの小谷津を挟んだ西側の台地上に位置している。調査区の現況は荒蕪地であるが，近年まで畑地として利用されていたとのことである。現地踏査では調査区内において遺物の散布を確認することはできなかったが，周辺の畑地において稀少ではあるが縄文土器の散布が確認されている。調査区周辺での遺物の散布状況やこれまでの調査成果から，今回のｂ地点の調査では縄文時代の遺構の存在が想定された。

調査の方法と経過

調査は，調査区の形状に合わせて10mのグリッド（方眼）を組んだのち，これに平行する形で２ｍ×４ｍのトレンチを設定して実施した。検出状況を確認しながら，適宜，トレンチの増設・拡張等を行い，遺構の捕捉に努めた。最終的に321.5㎡について表土除去・遺構検出作業を行った。また，旧石器時代調査トレンチを６箇所設定し，掘削を行った。

調査期間は平成15年２月21日～３月３日である。２月21日器材搬入，トレンチ設定，21～25日重機によるトレンチ表土除去作業，遺構検出作業，21～28日人力による旧石器時代調査トレンチ掘削作業，26～28日実測・撮影等記録作業，３月３日重機によるトレンチ埋め戻し作業，器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序は，Ⅰ表土層（旧耕作土層），Ⅱ黄褐色ソフトローム層，Ⅲ黄褐色ハードローム層，Ⅳ明黄褐色ハードローム層，Ⅴ淡暗褐色ハードローム層，Ⅵ暗褐色ハードローム層，Ⅶ極暗褐色ハードローム層，Ⅷ黄褐色ハードローム層，Ⅸ褐色ハードローム層である。遺構検出作業はⅡ層の上面で行った。地表面から遺構検出作業面までの深さは，約0.4～0.5mである。

調査の結果，遺構は検出されなかった。遺物は後期中葉の縄文土器の小片が11片出土している。第43図１～３は加曽利Ｂ式である。１は精製土器で，縄文に横位の沈線が施文されている。２・３は粗製土器である。２は紐線文，３は粗い縄文が施文されている。

調査のまとめ

今回の調査では遺構を検出することができず，遺物も後期中葉の縄文土器が11片出土したのみであった。県文化財センター調査区やａ地点及びヲイノ作遺跡北側地区は，花輪川やそこから派生した谷津を臨む台地縁辺部に位置している。しかし，ｂ地点はこれらの地点とは立地が異なり，花輪川の谷津から更に入り込んだ小谷津最奥部の台地上に位置している。遺跡の主体となるのは花輪川の谷津を臨む台地縁辺部である。これらの谷津から更に奥に位置しているｂ地点周辺は遺物の散布も稀薄であり，遺跡の主体となる地区からは外れていると思われる。

（註１）財団法人千葉県文化財センター　1989　『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡　－東葉高速鉄道引き込み線および車庫用地内埋蔵文化財調査報告書－』

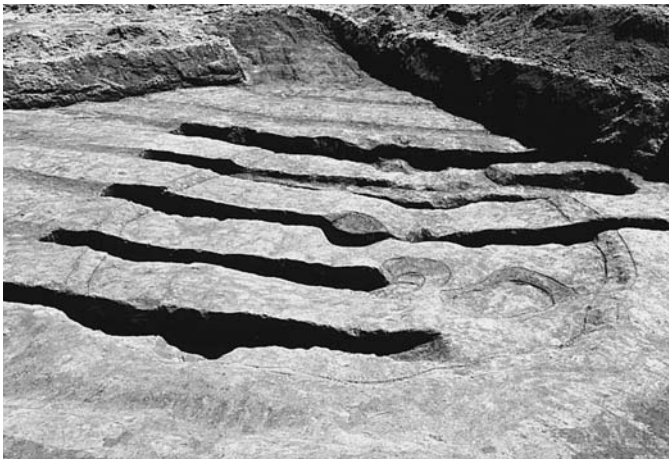
（註２）八千代市西八千代遺跡群調査会　1996　『千葉県八千代市仲ノ台遺跡・ヲイノ作遺跡他発掘調査報告書　―西八千代東部土地区画整理事業に先行した埋蔵文化財発掘調査報告書―』

（註３）当時はヲイノ作遺跡の北側地区として調査を実施した。しかし，現在北側地区は大和田新田芝山遺跡の遺跡範囲に含まれる。文献は註２と同じ。

（１）新東原遺跡ｂ地点調査区遠景

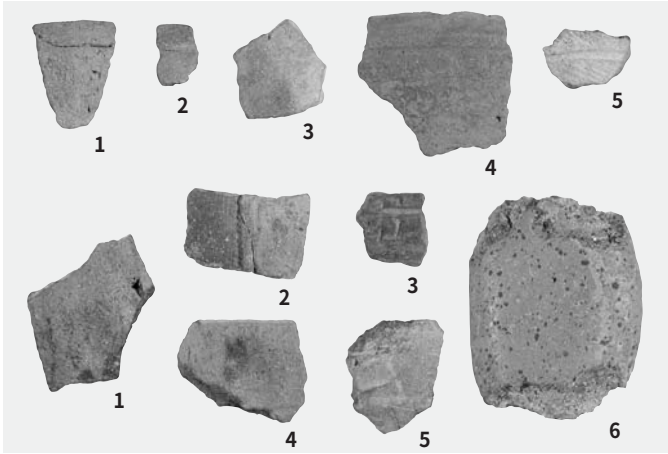
（２）新東原遺跡ｂ地点調査前状況

（３）新東原遺跡ｂ地点２Ｔ土層断面



（４）新東原遺跡ｂ地点１号住居跡完掘状況

（５）新東原遺跡ｂ地点調査風景



（６）新東原遺跡ｂ地点１号住居跡（上）・トレンチ（下）出土遺物

（７）内野南遺跡ｃ地点調査前状況

（８）内野南遺跡ｃ地点１Ｔ土層断面

図版２

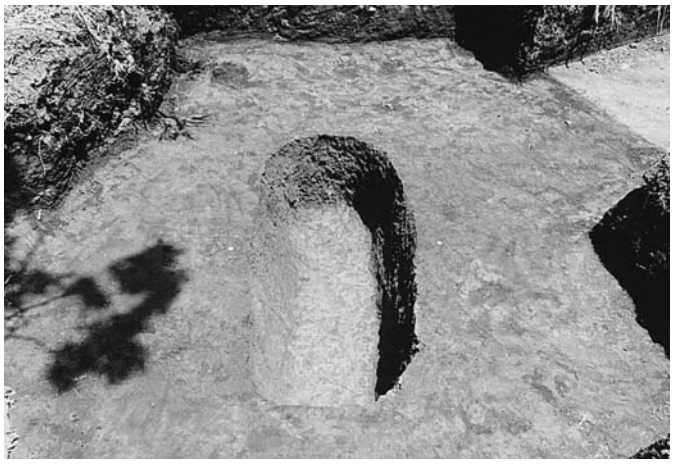
（１）内野南遺跡ｃ地点29T土層断面

（２）内野南遺跡ｃ地点１号土坑完掘状況

（３）内野南遺跡ｃ地点２号土坑完掘状況

（４）内野南遺跡ｃ地点３号土坑完掘状況

（５）内野南遺跡ｃ地点４号土坑完掘状況



（６）内野南遺跡ｃ地点５号土坑完掘状況

（７）内野南遺跡ｃ地点６号土坑完掘状況

（８）内野南遺跡ｃ地点７号土坑完掘状況

（１）逆水遺跡ｄ地点調査前状況

（２）逆水遺跡ｄ地点F3-1G土層断面

（３）逆水遺跡ｄ地点F5-4G住居跡検出状況

（４）逆水遺跡ｄ地点H5-1G住居跡検出状況

（５）新東原遺跡ｃ地点調査前状況

（６）新東原遺跡ｃ地点２T土層断面

（７）下船田遺跡ｂ地点調査前状況

（８）下船田遺跡ｂ地点調査風景

図版４

（１）木戸前遺跡ｃ地点調査前状況

（２）木戸前遺跡ｃ地点２T土層断面

（３）保品庚塚遺跡調査区遠景

（４）保品庚塚遺跡調査前状況

（５）保品庚塚遺跡１号炉穴完掘状況

（６）保品庚塚遺跡２号炉穴完掘状況

（７）保品庚塚遺跡３号炉穴完掘状況

（８）保品庚塚遺跡４号炉穴完掘状況

（１）保品庚塚遺跡１号住居跡・７号溝完掘状況

（２）保品庚塚遺跡２号住居跡完掘状況

（３）保品庚塚遺跡３号住居跡完掘状況

（４）保品庚塚遺跡１号土坑完掘状況

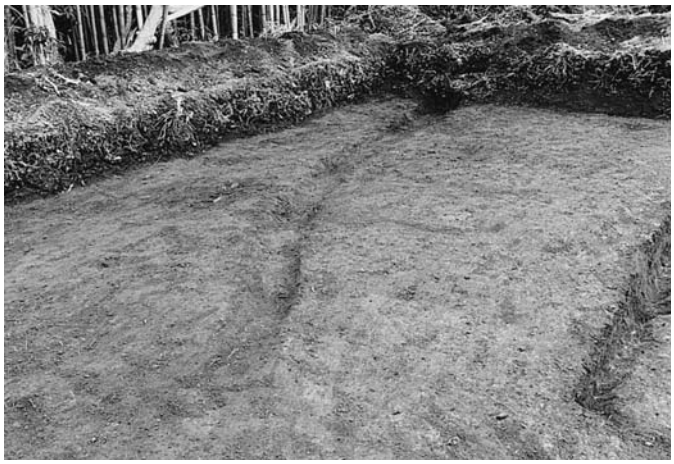
（５）保品庚塚遺跡１号溝完掘状況

（６）保品庚塚遺跡２号溝完掘状況

（７）保品庚塚遺跡３号溝完掘状況

（８）保品庚塚遺跡４号溝完掘状況

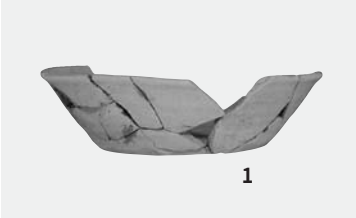
図版６



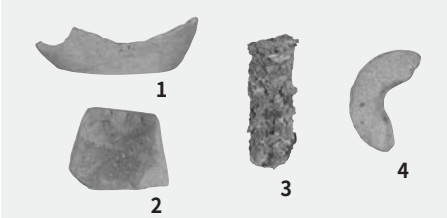
（１）保品庚塚遺跡５号溝完掘状況

（２）保品庚塚遺跡６号溝完掘状況

（３）保品庚塚遺跡炉穴出土遺物

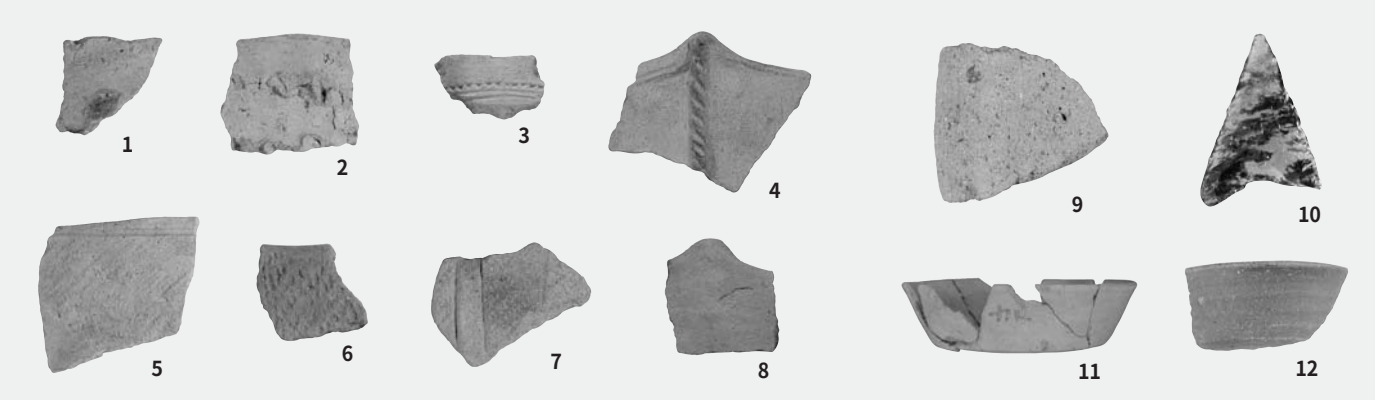


（４）保品庚塚遺跡２号住居跡出土遺物

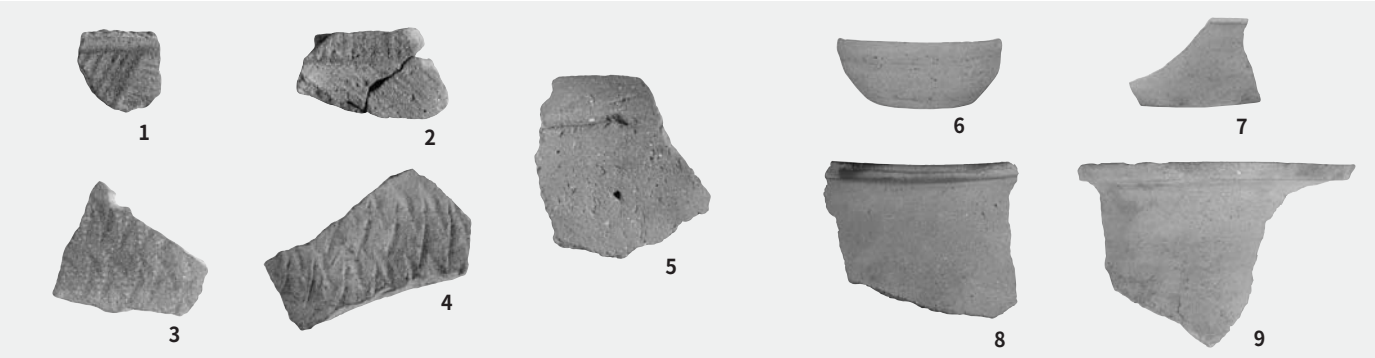


（５）保品庚塚遺跡溝出土遺物

（６）保品庚塚遺跡３号住居跡出土遺物



（７）保品庚塚遺跡トレンチ出土遺物



（８）保品庚塚遺跡表採遺物

（１）稲荷前遺跡ｃ地点調査前状況

（２）稲荷前遺跡ｃ地点調査風景

（３）稲荷前遺跡ｃ地点D3-1G土層断面

（４）稲荷前遺跡ｃ地点D8-1G土層断面

（５）高津梅屋敷遺跡ｃ地点調査前状況

（６）高津梅屋敷遺跡ｃ地点E2-1G土層断面

（７）大和田新田芝山遺跡ｂ地点調査前状況

（８）大和田新田芝山遺跡ｂ地点B4-1G土層断面

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ちばけんやちよししないいせきはっくつちょうさほうこくしょ　へいせい15ねんど
書　　名	千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成15年度
編 著 者 名	武藤健一・伊藤弘一
編 集 機 関	八千代市教育委員会
所　在　地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田138-2　TEL 047-483-1151
発 行 年 月 日	西暦2004年(平成16年) 3 月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんとうばら 新東原遺跡ｂ地点	やちよしかつたあざしんとうばら 八千代市勝田字新東原1266の一部	12221	259	35度 41分 46秒	140度 8分 24秒	20020430 ～ 20020507	確認調査　74㎡/330㎡ 本調査　25㎡	携帯電話用無線基地局建設
うちのみなみ 内野南遺跡ｃ地点	やちよしよしはしあざうちの 八千代市吉橋字内野1068-2他	12221	289	35度 43分 55秒	140度 4分 45秒	20020508 ～ 20020607	確認調査 2,792㎡/22,911.1㎡ 本調査　84㎡	店舗建設
さかさみず 逆水遺跡ｄ地点	やちよしよなもとあざさかさみず 八千代市米本字逆水1222の一部他	12221	100	35度 45分 29秒	140度 7分 13秒	20020522 ～ 20020529	確認調査 448㎡/2,645㎡	資材置場建設
しんとうばら 新東原遺跡ｃ地点	やちよしかつたあざしんとうばら 八千代市勝田字新東原1276-1他	12221	259	35度 41分 52秒	140度 8分 30秒	20021002 ～ 20021007	確認調査 上層112㎡/548.59㎡ 下層　4㎡/548.59㎡	携帯電話用無線基地局建設
しもふなだ 下船田遺跡ｂ地点	やちよしおおわだしんでんあざにいきどまえ 八千代市大和田新田字新木戸前49-2の一部	12221	164	35度 43分 1秒	140度 4分 35秒	20021008 ～ 20021009	確認調査 97㎡/463.32㎡	宅地造成
きどまえ 木戸前遺跡ｃ地点	やちよしおおわだしんでんあざにいきどまえ 八千代市大和田新田字新木戸前94-55	12221	165	35度 43分 12秒	140度 4分 57秒	20021210 ～ 20021216	確認調査 上層 27㎡/60㎡ 下層　3㎡/60㎡	携帯電話用無線基地局建設
ほしなかのえつか 保品庚塚遺跡	やちよしほしなあざかのえつか 八千代市保品字庚塚1634-2他	12221	81	35度 45分 11秒	140度 8分 4秒	20021213 ～ 20030203	確認調査 670㎡/3,200㎡ 本調査　230㎡	ゴルフ場造成
いなりまえ 稲荷前遺跡ｃ地点	やちよしかみこうやあざかみやつだい 八千代市上高野字上谷津台1126-1の一部他	12221	232	35度 43分 8秒	140度 8分 19秒	20030205 ～ 20030214	確認調査 200㎡/2,156.81㎡	共同住宅建設
たかつうめやしき 高津梅屋敷遺跡ｂ地点	やちよしおおわだしんでんあざにいきどまえ 八千代市大和田新田字新木戸前111-1	12221	166	35度 43分 9秒	140度 5分 14秒	20030219 ～ 20030221	確認調査 104㎡/2,244.52㎡	店舗建設
おおわだしんでんしばやま 大和田新田芝山遺跡 ｂ地点	やちよしおおわだしんでんあざしばやま 八千代市大和田新田字芝山889-5	12221	159	35度 43分 45秒	140度 5分 11秒	20030221 ～ 20030303	確認調査 上層 321.5㎡/1,947.71㎡ 下層 24㎡/1,947.71㎡	共同住宅建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主　な　遺　物	特　記　事　項
新東原遺跡ｂ地点	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　1軒	縄文土器，礫器	
内野南遺跡ｃ地点	包蔵地	縄文時代	土　坑　7基	縄文土器，石鏃，剥片，礫	
逆水遺跡ｄ地点	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡　2軒	縄文土器，弥生土器	
新東原遺跡ｃ地点	包蔵地	縄文時代	なし	縄文土器	
下船田遺跡ｂ地点	包蔵地	縄文時代	なし	なし	
木戸前遺跡ｃ地点	包蔵地	縄文時代	なし	なし	
保品庚塚遺跡	包蔵地	縄文時代	炉　穴　4基	縄文土器，石鏃，石皿，礫，玦状耳飾	
	集落跡	奈良平安時代	竪穴住居跡　4軒 土　坑　2基	土師器，須恵器，鉄製品	
	包蔵地	近世以降	溝　7条	鉄製品	
稲荷前遺跡ｃ地点	包蔵地	縄文時代	なし	なし	
高津梅屋敷遺跡ｂ地点	包蔵地	縄文時代	なし	なし	
大和田新田芝山遺跡 ｃ地点	包蔵地	縄文時代	なし	縄文土器	

千葉県八千代市
市内遺跡発掘調査報告書
平成15年度

印刷日　2004年 3 月26日
発行日　2004年 3 月31日
発　行　八千代市教育委員会
〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2
TEL 047-483-1151